

錦段繡。續虛粟。雜談集。雉尾琴。萩の雲。句兄弟。類掛子。五元集。

などならむか。

其角は實に江戸座俳諧の祖なり。其角歿後江戸座の一派ますく盛にして連綿として二百有餘年の今日に傳ふ。

服部嵐雪

蕉門の桃櫻

蕉門の桃櫻、正風の両菩薩、香芬四方に薫り、光明今にまはゆし。其風の二家、豈に他の紛々たる蚊虻の輩と、日を同うしてかたるべけんや。寶晉齋を知るもの、いかでか、この史登齋を觀察するに、嚴密なる眼光を以てせざるべけんや。

かれが初めて呱々の聲を揚げしは、南海の一孤島、淡路の小板並村にありき。かれは漸く長するに及びで、名を彦兵衛といひ、江戸に來り、某侯に仕ふ。かれの武士にてありしなり。然れども兩刀を帶したる彦兵衛が、身邊には、何時の間にかやら詩趣流動し來りぬ。

あつて井の水をくみて、足を濯がむとす、卒かに霰ふりしきりければ、

武士の足で米とぐ霰かな

蕉門に入

と吟す。げにかれが俳諧は天與にてありしなり。

こゝに於て、かれの世を遁れて、風月に嘯かむとするの志あり。什具家財をすつる破れ草鞋の如く、飄々乎として、碧空を仰ぎ、世のうるさききづなをたちて、遂に蕉門に入りぬ。

かれ一とたび蕉門に入るや、翁、一見、胸を指して、教ゆるところあり、かれも、また其角等と、相携へて、うの誘掖を空しからさらしめむと期し、嵐亭、治助、史登など號して、しきりに俳諧にわそぶ。

風味をみ
めて悟得
する所あり

元禄十二年、風雅のたしなみある妻、烈女歿しぬ、この時ごろにやありけむ、嵐雪、濟雲和尚に従ふて、禪味をなめ、頗るその幽奥に達し、悟得するところありき。かゝる性を有せしかれが、かゝる誘掖によりかゝる嗜好をそとて、其角破笠等と深川に蟠居し、醃菜一味、夜具一領に自得し、樂遊して、餘念なかりしも、

生れながらに詩想を有せり

あやしむに足らず。
かく、かれは世にそひきたれども、その和暢の性は、よく其角の如く豪放ならざりしなり。而してまたかれは許六、支考の如く、論評を事とせざりしなり。何となれば、かれは生れながらにして詩想を有し、また詩人たらむことを期したればなり。

雪門の一

かれが俳諧は、よく芭蕉が詩心の内裡を貫きぬ。この故に、かれは其角が、同門の人の譏を蒙りしが如き、變風をなさざりしなり。かれはよく師翁の衣鉢を襲きて、さらに江戸民心の傾向を加味せしめ、雪門の一派を勃興し、その門に二世更登を出し、周竹を出し、遂に蓼太を出しぬ。香しき雪門一派は、伊達なる江戸座の一派と相並んで、まけず劣らず、今にたえず。豪放なる其角が性は、その俳句をして、瑰奇華燦ならしめたり。和暢なる嵐雪が性は、その俳句をして清洒精妙ならしめたり。思ふに、嵐雪が特技は、こまやかなるにあり、やはらかなるにあり。而も切に徹せざるなく、しなやかにしてふれざるな

嵐雪の特技

く、情、厚くして貫かざるなし。かれが俳句のかたちは、櫻にあらずして、むしろ、桃にあらずるなきか、艶治にあらずして、むしろ、淡麗なればなり。深切、精到、清秀、平和、これ嵐雪が、嵐雪たる所以にあらずるなきか。

元日や晴れて雀の物がたり

この自然なる一句を誦すれば、和氣洋々たる元旦の風光、發動し來るにあらずや。

薄團着て寝たる姿や東山

この渾然たる句を誦すれば、土佐繪に見たらむ如き、西都の景色、浮び來るにあらずや。

花に風軽く來て吹け酒の泡

これ、うららかなる春の野に、櫻かざして遊び、さまよふ、行樂の人の、さまを描出して、遺憾なきにあらずや。

梅一輪一りんほどの暖かさ

ひと日、ひと日、長閑なる景色まなこに映す。

初秋の心うごきぬ繩すだれ

細りたる蟬聲、吹き初むる金風に送られて、耳に入らば、たれか、この情なからむや。

一葉ちる咄一葉ちる風の上

語の、たゞ自然、句は、たゞ一葉、すかたは、おれ秋風一吹、而も天地の玄妙を道破す。これを誦して泣かざるは、涙なきの人なり。

また、かの菊の句の如き、高青邱か梅花九首と比して、世に賞讃せらる。阿諛を事とせざる其角も、心からして嘆美しぬとぞ。今これを左に記せむ。

菊花九首

- 一、 菊もまだつゆくつほむ九日かな
- 二、 素裳帯にて人々十日の菊を見る
- 三、 百菊をな揃へけるに
- 四、 黄菊白菊其外の名はあくも識

五、 あやめのたけのみやびやかある

立すがたありけらく菊を見て

鶴の聲菊七尺のあがめかな

六、 琴

琴は語る菊はうぶづく羅かあ

七、 香

菊買ふはまた香に負けし人なるとん

八、 畫

書を抽る芭蕉にねぶれ菊のちこ

九、 齒

菊さけり蝶来て遊べ繪の具皿

五色墨の序

何ぞそれ自在なるや。 かれ、かつて續五色墨に序して、いはく、

一天春回て。萬花匂ひ、秋うよふいて、果、色づく、享保いつの年か、交友、歌仙を綴て、五色墨を題し、今も世に流ふ。ことし新に、夕可庵下き、予が門人五子、ふるまきすかたにより、相互に判を添やりて、續五色墨とよばふ。風流は天にあり、地にあり、ものれく、心にありて、是れを觀するときは、すべが、暝時は退く。宋の東坡は句を作す毎に、門前の卑媿に問ふ。和朝の何某は、河嶽のはたらきを見て、續術の奥意を悟れりと。たゞつこめて忘ることなからまほしき業あり。都て當時の俳風知るも知らぬも、芭蕉流さうめさあへるさへ、誠の附合と辨へず、打越にからみ、一折の運び地曠、皮肉骨の境に

うろたへ、終に一巻、成就、朝はざる巻々多し。今の五吟、新古を差別し、道に曲れるを以て、已か姿を正し、就るてにはに油をそへて、俳燈をかゝく、實に深き志のいたす所なり。はた馬光老人と、予、俳歌や、四十年に餘る。甚親しからず、亦疎からず。秋の蝴蝶の野らにへろつき、九人はなしといへる十八目の友にあそぶなつき、今此篇を聞て、共に笑ひを添、若人の長月やなかからむ交りを、淺生の瀟々らず、賀して、燈下に筆を握て、うつくる。

この中にいへりし語を讀み來らば、かれが俳諧に於ける用意の周到にして、其角を俱に芭蕉門の二勇將となり、幾多の俳士の頭上を濶歩したる所以を知るに足らむ。

嵐雪の著

かれ、黄落庵、寒蓼庵、不自軒、玄峰堂、雪中庵、佛山居士の雅名あり。また畫名を良香といひぬ。其傳、賣若菜、若水一周忌、杜撰集、或時集等の著あり。

寶永四年十月十三日歿す。

余等はこの章を終るにあたりて、かれが秀逸、二三を味はざるべからず。

酒のさき人にからまる蝴蝶かな

ぼっふりや水の行衝のいつこまで

初空やかよすなのせる牛の鞍

羽子板やたゞにめでたきうら表

行燈を月の夜にせん郭公

若水に智恵の鏡を磨はや

見たきもの花紅葉より樓木哉

菜の花や戸口見つけてまはり道

願禮と打まじりゆく歸雁かな

向井去來

向井平次
肥州時

去來は、通稱を平次郎兼時といふ。姓は藤原河邊の大臣、魚名か裔なりといふ。肥州に産る。その兄、京師に移住するに及むで、ともに上り住す。兄の醫を業とし、頗る聲名ありき。

資性
武技に通

資性、温良孝弟に篤し。その郷にあるや、武技をはげみ、御馬、劍術を學び、甲州流の軍法を修め、その旨を得たりといふ。後、京に來るや、薄田某の門にあそびて、八重垣流をうかひ、王法陣の圖を傳受せらる。かくて神道に心をひそめ、うの秘奥に達しぬ。一代の詩賦和歌も少なからず。一度、芭蕉に邂逅し、いたく俳諧の風骨をよるこび、専心奉持して倦まざりし。

初め嵯峨の落柿舎に住ふ。芭蕉嘗てこの舎に來りて、記をつくる。去來も、また記文あり今こゝに、これをかゝげむ。

落柿舎記

嵯峨にひとつの、ふる家待る。そのほざりに、柿の木、四十本あり。五とせ、六とせ、經ぬれど、このみも持來りす。代かゆるわさしきかれは、もし雨風に落されば、王祥が志にもほぢよ。若葉鳥にさられは、天の帝の、めぐみにしれなむと、屋敷もる人を、常はいさみ、のしりけり。ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふし、みやまより、商人の來り、立木にかへ求めむと、一貫文さし出し、悦びかへりぬ。予は、猶そこに、さまりけるに、ころくと屋根はしる音、ひしと庭につぶる、聲よもすがら落もやます。明れば商人の見舞來り、袖つくくと打詠め、我もかふ髮の頭より、白髮、生るまで此事業とし侍れど、かくばかり落ぬる柿を見す。きのふの價かへしくれたびてむやと、佗いさ便きければ、ぬるしやりぬ。此者のかへりに、友ごちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書はしめけり。

柿ぬしや木ずみはちかきあらし山

またその舎に壁書していはく。

- 一 我家の俳諧に遊ぶべし、世の理屈をいふべからず。
- 一 雑魚寐には心得あるべし、大駟をのくべからず。

一 朝夕かたく精進を思ふべし、魚鳥を忌むにはあらず。

一 速に灰吹をすつべし、煙草を嫌ふにはあらず。

一 隣の居膳を待べし、火の用心にはあらず。

その風流ももしろしといふべし。後、東聖護院にうつりぬ。幽窓を推して、眸をばなては、東山の花、加茂川の水、かれが風流の心になふて、吟詠の料を興へぬ。

寶永元年九月十日、この幽居に没す。年五十四、東山鈴聲山に葬る。

去來が行狀につきては、尙義、記して精をさはむ。まゝ褒辭に過くるの、嫌なきにあらねども、以てそれが面目を知るに足れり。そのうちにいへるあり。これによつて、貴介公子も、そのこと葉を味ひ、その徳をよみす。四方の俳師遠き近き當世の墨客者流、才を狭み、簡傲非笑するものといへども、その風采を感じ、惇睦間言ある事なく、心服謁拜して、席下にわしり、此道の先達とす。凡かくのごとく、得る事の多く、守る事の篤と、文武の才をいたさ、貞諒人を感じ

るに至れども、知るもの稀に、あけて薦むる人なり。先生、もとより官仕の途をたち、退てもつはら兄に仕る、さばめて恭愛、其家事を治め、内外のかきりわから、財用の節を制し、使令を給する、れのくその役にたへざるものなり。誠意懇切、其勞をゆるべず、人のかたしとする所、みつから處する裕如なり。いはんやその子弟、宗族、朋友の間にあるをや。たまく家に歸るの道。農夫の耕し、耘るあれば、必ずその勞をとふらはされば過す、隣家此屋の艱苦をといひ、病をたつねすくふて後やむ。うの惻恒慈愛の心、しのびさるにあり。

先生爲人。孝弟貞誠。事兄竭力。處事必正。

有文有武。風雅華英。存思其人。亡慕其名。

凡そ俳諧世界に遊ぶもの、多くは浮世の塵をいとふて、豪放、不羈専ら奇異、狂妄を恣ひ、自ら快とするもの多し。去來の中心に立ちて、よく溫良、和惇の薰風を扇つて、簡傲非笑の輩を去て、心服謁拜せしめ、萬人をして欽仰せしめたる君子の徳ありは、よろこぶべきなり。その、予が性もと柔弱にして、敵

君子の風

西俳諧奉行

に當るの器にあらず。心虚勞を兼病す、向來なは弓を射、矛を振ふの力なけむといふて、謙讓するが如き、よし猛進一番して、一旗幟を俳壇に樹立するの勇力なきに似たれども、芭蕉の教訓を体し、その掟を破らむ事をこれ畏れたるが如き、げに愛敬するに堪へたり。されば渡白狂も、蕉門に此人ありて、其性は殊に篤實にして、常に言語の虚に遊ぶ。師芭蕉も、誠に去來ありて、鎮西に俳諧奉行なりと云へりて、褒賞措かさり。またかの剛腹不遜、高言放語し、人を人ともおもはざる許六も、その諫をつくりて、

弓矢を捨て十五年さ吟したるは、十五年先の事なり。合せて三十年來の大隱士和名、これを浪人といふありけり。いつの頃よりか、先師蕉翁にまみへて、風雅の名に高ぶり、師よかまへて、諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ、東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱して、あし野の時、正風体のまなぶをひらきて、

湖の水まさりけり五月雨

とかや、猿蓑の選を蒙りて、不易流行の街をわかち、後援の野風にのぞみて、終に幽玄の細みをわすれず。

木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほごんぎす啼や雲雀の十文字
と申けり。又いつれの仲秋にや、

岩はなやこゝにしひさり月の客

と吟して、先師の耳を驚かし、月夜説の第一、古今の香逸には極まりたり。すへて一代秀逸は、一兩句もてる人さへ稀あるべし。此おのこは、已に數句に及べり。二十餘年新水の功積み、嵯峨の落落柿に師を迎へ石山の幻住庵に老を訪ふ。心こそ深く、一とせ雄波の變を聞て、速にこもつたな解、義仲寺の翠にも、肩衣に鋤鎌を携ふ。死後の城を堅く守り、諸生をあつて、初心をたすく。

以て去來の人物伎倆を想見すべし。彼れ争をこのます、また殊更に、儕輩にぬきじてとはせざりしも、却て同門の尊敬愛慕をうけたりき。蕉門の高弟にして、吾輩の先生如何であ、この人の行くをふしまざらむと、支考の追慕せしも、あやしむにたらざるなり。

かれ其角の鬼才なく、嵐雪の學識なきも、芭蕉のかれをみる、おのが子の如くなりしは、一はその温厚の性により、一はその俳句が平淡の境中、妙趣宛も天籟の如く、ゆたかに一新相を畫して、鎮西奉行の名、空しめらざりければなり。かれは武門より出てたれば、かたき所にやはらかみありと、考考の評せし如

去來が名
句

く、凡そ吟詠は、その人の、性行の氣中にほころび咲ける花なれば、その色あるひは紅く、あるひは青く、あるひは白く此處かしてはその特相をあらはさずではやまじ。この奇をてらひ、人を驚かさむとする心、露あらざりし去來が、その吐出せる句の、平易淡泊なるも宜なりけり。今その風格を左にまめさむ。

銖たゞき來ぬ夜となれば麗なり

知人にあはしし花見かき

何事ぞ花見る人の長刀

名月や海もおもはず山もみす

涼しさよ白雨ながら入日影

妹の追善に

手の上にかさしく消る螢かあ
万歳や左右にひらいて松の陰
立ありく人にまきれて涼かな
いくすべり骨折る岸の蛙かあ
あつぶともゆくともしらぬ燕哉
夕くれや帆並びたる雲の峯
はつ露や猪の臥芝の起あがり

仲秋の望猶子を葬送して

かゝる夜の月も見にけり野送送
 月見せん伏見の城の捨那
 魂棚の奥なつなじや親の顔
 應々といへどたゞくや雪の門
 石も木も眼も光るあつさかあ
 いろかしゃ沖の時雨の眞帆片帆
 尾頭のぶらうらもさあき海鼠かな
 あら磯やはしり馴れたる友千鳥
 いあつまのかきませて行閑夜哉
 麗月一足つゝもわかればあ
 石指に猶喚入や淵の鮎
 黒染の眉の毛長し冬こもり
 朝なくの葉のはたらきや杜若
 百姓も夢に取つく茶摘かあ
 うき友にかまれて猫の空あがめ

兼致清池

この句を誦し來らば、いと平かにして、いづこにも巧めるふしなく、而もしづ
 けさ春の池の面の漣うねくと彩紋を畫くようればえて、味へば味ふ程、清

き、うるはしき雫の、滴々落下し來りて讀者をして、陶然たらしむるにあらず
 や。

げに去來は、芭蕉の忠臣にして、正風の豪たり。

僧丈草

尾州犬山
の藩士

丈草は、尾州犬山藩の重臣にして、幼名を林之助、後林右衛門といふ。性得、學
 を好のみ、和漢を究め、頗る蘊奥に達す。繼母に仕へて至孝なり。二十五歳の
 秋、八月五日、思ふとあろありて、武門をのがれ、緑の髪をふしけもなく、削り
 すて、佛門に歸す。或は傳ふ、繼母の産める弟に、家祿を譲らむとし、自ら指
 を切り、刀の柄握る能はさればとて、遂に仕を辭せり。あくて熊野山先聖寺
 にいたり、玉堂和尚につき、禪を修め、常に法華經を讀誦して餘念なし。その
 時の口ずさみに、

削り
て佛に入
る

多年負屋一蝸牛。化做三蛤蟪、得自由。

火宅最惶涎沫盡。偶尋法雨入三林丘。

涼風にきゆるを雲の宿りかな

生平、學得の禪味油出せるをふぼゆ。

芭蕉の
芭蕉庵

かくて、蕉門に入りて俳諧をまなび、琵琶湖畔、粟津の龍か岡に、閑寂の庵をむすび、佛幻庵と號し、興來れば吟し、つくれば風月にうそふき、優々自放、飄々乎として俗務の一もかれを檢束するものなし。浮世の榮華をみるの眼をどちて空虚の境にあそぶ。

芭蕉の子
芭蕉

芭蕉死後、追慕して義仲寺のかたほとりに菴をむすび、洪養ふこたりなかりしなど、その篤實の性見えて、孔門の子貢など思ひ合されて、感するに堪へたり。寛永元年二月、四十二にて没す。一説に元祿十七年二月廿四日、四十五にて没すといふ。

芭蕉の面
芭蕉

去來誅をつくりて弔す。頗る丈草の面目を描寫しつくしたれば、左に録せむ。
(前略)其後、洛の史邦にゆかり、五雨亭に假寐し、先師に見へ初られより二疊の蚊屋の内に、頭をぬし並べ、四間の火燵の上に、面をさしむけて、吟會

れほくは此人をかゝす。先師の言に、此僧此道にすゝみ學はゞ、人の上になむ事、月を越べからすとのたまへり。其下地のうるはしき事、うらやむべし。然れども、性くるゝみ學ぶふとを好まず、感ありて吟じ、人ありて談じ、常は此事打わすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ頃、此邊の句ども、書あつめまいらせけるうち、大原や蝶の出て舞ふればる月、坏いへる句、二つ三つ書入待りしに、風雅のやゝ上達せる事を評し、此僧なつかしやいへどは、我方への傳へなり。又難波の病床、側に侍るもの共に、伽の發句をすゝめ、けふより我が死後の句なるべし。一字の相談を加ふべからずとの給ひければ、或は吹飯より鶴を招むと、折からの景物にかけて、ふとぶきを述、あるはしかられて、次の間に出ると、たよりなき思ひにしはれ、又は病人の餘りするやと、むつまじさかさを盡しける。其ふしぐも等閑に見やり、たいうつくまるさむさかな、といへる一句のみぞ、丈草出來たりとは感し給ひける。實にかゝる折には、かゝる誠はさうごかめ。興を探り、作を求る、い

とまあらトとは、其時にふそ思ひ知侍りけれ。先師遷化の後は、膳所松本の誰かれ、たふとみなつきて、義仲寺の上の山に、草庵をむすびければ、時々門自啓、曲々水相逢、など、打吟じ、あるは杖を横たへ、落柿舎をたいて、飛込だま、か都の子規とも驚かされ、予も彼山に這のぼりて、脚下登湖水、指頭花落山、と眺望を共に侍りしを、人は山を下らざるの誓ひあり、予は世にたよふの役ありて、久しく逢坂の關越る道もいらす。去々年の神無月、一夜の閑をぬすみ、草庵にやどりて、さむき夜やおもひつくれば山の上、と申て、ふよひの芳話に、よろづを忘れけりと、其喜びも斜ならず。更行まゝに、雷鳴地にひびき、吹風扉をはなちければ、虚室欲々、閑是寶、滿山雷雨震寒更、と興一出られ、笑ひ明してわかれぬ。身の上を啼からず哉とさよへし、雪氣の空もふたゝび行めぐり、今むなしき名のみ残りける。凡十年のわらひは、三年のうらみに化し、其恨は百年のかなしみを生ず。をしみても猶名残をしく、此一句を手向て、來しかた行末を語り侍るのみ。

なき名きく春や三どせの生別れ

かくの如く、かれは、平常たゞ滿興の餘に乗じて放吟す、必しも、つとめしのび奇巧を勞せむとはせざりしかば、彫琢、推敲の痕なく。一かも老手勁強の致ありて、高潔なる禪味、油然として横溢するの觀ありき。野坡が許六と論争せる書翰中にいへるとあり。

俳句老勁
高潔

春雨の蜂の巢、是は誠に世の人、左程に沙汰をせぬといへども、奇妙天然の作なりと、翁も常々吟じ申され一事なり。此蜂の巢は、去年の巢の、草庵の軒に残りたるに、春雨のつたひたる静かさ、面白く、いひとりたる深川の庵の體、其儘にて幾度も落涙致し候。凡俗を離れ侍る句なり。よせ物、取合物と心を付候は、作に落入、深々妙々至る事ある間敷候。初心の輩は、其道具に尋迷ひ、一代風雅を取留申事ある間敷候、翁死後には、東西の門人、丈草をしたひ申に、此人左のみ、世に差出たる程の事もなく候へとも、翁の作神を得られ候にや、うらやみ申事にて候。

俳句

以てその尊敬せられたるを見るべし。左にその句を抄せむ。

黒みけり沖のしぐれの行きころ
 水底の岩におちつく木の葉かな
 鷹の眼の枯野にすはる嵐かな
 水底を見て来た顔の小鴨かな
 聖殿もきて假の夜の旅寝かな
 野も山も雪にさられて何もなし
 啄木鳥の枯木さがすや花の中
 松風を中に背田のうよきかな
 雨乞の雨着こはがるかり若哉
 あら猫のかけ出す軒や冬の月
 大はちや蝶の出てまふ扇月
 うかくと来ては花見の留守居哉
 幾人がしぐれかけぬく勢田の橋
 悔いふ人のさきれやきりくす
 水風呂の下や案山子の身の終
 芦の戸や現撫揚る夢さうろ
 取つかぬちからでさかぶ蛙かな

ぬげがらにあらびて死ぬる秋の蟬
 ほとくすず晴や湖水のさら濁
 小夜ちどり庚申まぢの舟屋形
 思はずの雪見や日枝の前夜
 舟月の道かたよけて月見かな

森川許六

菊阿佛

許六は、江州彦根、井伊家の給人にして、名は百仲、字、羽官、菊阿佛と號し、居を稱して五老井といふ。人となり敏慧多能、俳諧をこのみ、蕉門に入て學ぶ。また書を嗜み、狩野安信に隨ふて、頗る妙手の譽あり。同門の人、多くその風を慕ひ習ふ。芭蕉も、書は取て師となし、俳諧は教へて弟子となすといへり。許六の名は、所謂六藝に通ずるとの意義より來りて、師の與へるものなりと云。研習功積むて、俳諧壇に於ける名聲頗る揚り、十哲のうち之列りぬ。傲慢の氣を帯びたる天賦の奇才は、抑へむと欲するも能はず。矯健の文を驅て、左を雄き、右をたゝかひ、同門の人を獨狗の徒となし、已かまに縦横濶歩す。こゝ

多能

蕉門の忠臣にして大將軍 直指傳

に於てまゝ、人の嫌惡を來したれども、その銳鋒を畏れて、さくるもの多かりき。予短才未練なりと雖も、一派の俳諧に於ては、大敵をうけて、一方の城をかため、大軍を眞先駈け、一番に討死せんとするの志、鉄石の如し。故に同門の嫉み嘲りを願はずといふに至る。其の自負の念甚たしきにも拘はらず、實に蕉門の忠臣、一方の大將軍なりと評せし去來が言、いかで分に過ぎたりといふべけむや。また俳諧の幽奥に、下駄はきて入りこみ、先師の發句仕様を、前後によく知り、その底をぬき、古今に渡るものは、五老井一人なりとて、直指傳を草するうちにいへるあり。

我東に趣き、始て師にまみゆる時、旅の句問れけるに、宇津の山にて、

十圓子も小粒になり秋ぬの風

と申ければ、師驚て、汝何れの教によつて、愚老が流を見届たるやと、我あら野猿蓑を師とすと、吾子は俳諧の集を見る者なり。今わが腸を見ぬかれたりといふ。再會の日、嵐園子に語て曰、我門人の器をもとめて、はいかい

を殘さむと思ふに、昨日、許子に會して我望を休せり。撰集に我魂をといひる時は、後代許子かときものも又あるべし、千歳の後も、愚老か血脈は朽ざる事を哀れり。

師の言を引きて、千歳の後もわが如き眼睛だにありて、撰集を讀み、その奥に達せば、俳諧正風の血脈は、朽ちざらむといふ自讃、何ぞ甚まきや。また、われこの時はじめて、眼ひらきて、

人先に醫者の拾や衣更

といへば、師云、是也。吾子が俳諧の底は、此所にぬけたり。はいかに底ある者は、新古にわたりて自由を得ず。愚老は、常に許六か行末を恐れて、みだりに句をいはず。

また、いはく、

其角支考は、下手にてはなし。先師の口僻は、よく眞似ける。芭蕉流にはあらず。ばせを流、正風体の血脈を得たる者は、われなり。

と放語し、今正風の本領を示さむとて、自詠の句をかゝげぬ。

三月盡

けふ限の春の行衛や帆かけぶれ
 春ふれや田の音吉に啼かはす
 四五月の卯波さ波やほこもぎす
 わが跡へ鉄々立よる清水かな
 欄干にのぼるや菊の影法師
 香經の間を朝がほのさかりかな
 初霜や鐘樓の道の脊のあこ
 はや雪や治る江戸の人こころ

是先師滅後の句也。先師生前の耳を驚せざると無念にして、今又一人も、此句の腸を聞人なきこと、猶又無念なれ。後人、芭蕉翁の血脉嗣人なしといふ事なかれ。

と讀みて、こゝに至らば、氣、斗牛を貫くの慨あるに非ずや。蕉門の血脈嗣人なしと憂ふるなられ、五老井許六これにあり、人はいかにとも、いはいへかたど大喝して、はゝからざるに至つては、徒らに諛言を事とする流俗の上に脱出

して、その自負の甚たしきにも拘らず、きはめて愛すべき剛勇の氣宇あるをればゆ。この語をなす、豈に胸中自らたのむどころなくして能ふべけむや。

されば支考も、江東の許六は、風雅に大剛の男にして、管城に俳諧の旗をひるがへし、詞林に文章の斧をよこたえて、天下の俳士を説破するに、俳諧壇上はその印をかけて、鐵心石肝の大將といふべしといふて、その死を吊するに烈る。

かく、剛氣自尊の許六なりしかど、恭謙の態ありしとは、隨齋諧話中の一語を以て知るべし。いはく、

彦根の許六は、世に自負放言の人とれもへるに、常に温厚謙遜の人にてありしとぞ。ある時、一士人來りて俳諧の指南を乞ふ。許六辭して、うけがはず。士人懇に、いひてやまず。許六のいふやう、われ人にかゝゆるほどの事いはず、ゆるし給れといふに、かの士すふし不興し、某、此道熱心なればよそ、かくまでには申せ、御教示を得ても、ものゝやくにたつまいさものなりと、脚

見かきありありて、さはの玉なるべしと、すふきあら／＼かにいふ時、許六に迷惑せら体にて、さらにはさやうの事ならず。われ俳諧に何の心得たるものとなければ、いなみ申なり、足下はまた何によりて、かくは仰らるゝぞといふに、かの士いよく憤りて、それは某をわざむき給ふなり。既に御著作のものあまた熟讀するに、芭蕉門に於いて血脉相承する人、世更らになし。君ひとり爰に傳灯の俳諧なりと、いふふとをあらはし給ふ。さる故にかくは望み申すなりといふに、許六打わらひて、まことにさにて侍るや、あの著述のものは、みな／＼一時のたはふれとにて候ぞや。あのたくひの書るものをもて、賢とし給ふは痛入たる事なり。もとよりねな／＼となれば、必それらにすかされ給ふなど、いふふ、士人閉口して戻りしとぞ。

許六、豈に人をわざむくの士ならむや。凡そ人の性に、正と變とあり。熟しては、墳火山頭、爆發して千万丈の光炎を吐き、冷却しては、秋風の枯桐をはるふて、颯々として窓をうつが如けむ。かれ生平この豪氣あり、この抱負あり

この謙讓なからむや

豈にこの謙讓なからむや。

晩年、癩を病み自らはぢて、人にあはず。問ひ来るものあれば、屏風のうちに座して相談す。嘗て萬子、來つてあはむとをのぞむ。萬子は金澤の俳士、教をかれに乞はむとて來るなり。許六これをきき、最愛の妻子だも、さけて見るとをなさ／＼りしものが、直ちにこれを病床にひきて、憚なく相話す。遂に酒をくむで談論し、病を顧みず。すでにして口唇くづれおち、臭氣堪へがたし。萬子も、またこれを意とせず。遂に献酬し興ます／＼みちて、雅談四隣をおどろかしぬとぞ。あはれにもまた雄々しからずや。

剛腹不遜を以て評せられし許六が、師芭蕉を欽慕愛敬したる、その歿後櫻樹をけづりて、肖像をささみ、これを智月尼のもとに、ねくり／＼文を見は、思ひ半に過ぎむ。

師を愛慕するの情

御床敷節せうそこ御無事の由目出度存候。拙者事いまたすき然御座候像も及延引候。此度翁も手に觸られ候、五老井の古木にて、刻みまゐらせ候。兼て

大なる像刻み度皇御座候へ共病氣に叶ひ難く、猶又得意申候不備。十月三日
霜の後、露に添ゆべき菊もなし

許六

智月尼様

かれ、豈にたゞに放語自尊の徒ならむや。以て、かれが疾風の如き性あるとくもに、春風の如きものを知るに足らむ。かれが一代の秀句は、蕉門の光たるに足るものなり。譬へ去來が評して、我蕉門に年久しきゆへに、名は高けれども句にれるてその靜なる事、文章に及ばず。うのはなやかなること、其角に及ばず。輕き事、野坡に及ばず。仕ふること、士芳に及ばず。巧なること、正秀に及ばず。といひたりとは雖も、その句を誦すれば、師が幽玄の俳調をうけて、一種の異味あり。妙巧をきはめぬ。今その風格の一二を示さむ。

蚊やり火に團扇あてけり秋の風
田樂や仰向く口へ舞ひばり
出代りや給仕しまふて晦乞

一年は死装束や土用干
苗代やうれし顔にもあく蛙
灸の點干ぬ間もさむし春の風
嫁入の門も過けり鉢たゞき
大名の寢間にもれたる夜寒かあ
はつ雪や先馬やから消えそむる
在明となれば度くしくれかあ
禪門の革足袋あるす十日かあ
夕立にをどり出けりところてん
蚊やり火のけふりにそれる螢哉
本箱よ成へき桐の若芽かあ
かけろふや壁のぬれたる夜の雨
出代りや給仕しまふて暇乞
麥跡の田植や還きほたるとき
腸をさぐりて見れば納豆汁
うの花に芦毛の馬の夜明かあ

木曾路にて

山吹も巴も出る田植かあ
出かはりやあはれ勤る卒加帳

寶永二年、許六、風俗文選を編む。往年芭蕉が俳諧文をたこし、鄙語、漢語、和語、を打つて一九となき、一種の氣韻を生動せしむるや。同門の人、またこれにならふて草するところ多し。こゝに至つて、許六これを編む。

許六の才は、いちじるしくこの散文に於て發起せられぬ。その百花譜の如きは、筆路流暢、きはまるが如くにして、また際なく、散しては、春の曙たなびく、臆の霞となり、あつまつては。枝うちかざしたる千々の花とも見ゆ、形容比喩興の至るところ、筆をたしたがふげに一奇文といふべし。今その一節を左に摘録して、この章を終へむ。

百花譜

梅の風骨たる事、水陸草木の中に似たる物はあらじ。十月一陽の氣に、燦々たる江南の王妃、まづねめるより、生涯を物すきにくるゝみ風流のはそみにをはる、是を色にたどへていは、吉野高尾などいふべき遊君の、心ふとなく、名を耻、いき過たる心より、相火の高ぶり、かたち瘦きすに、涙もろくきの、の我に飽ける心より、一たび着たる衣類調度など、ふたゝび目にもか

けず、人に打くれ、金くれる男なれども、愚痴なるにはすりぬけ、請出さるゝ場所をはづして、はづむたる男の一言に、百年の富貴をかへたり。借錢の利に利を重ね、やうく盛も過たる頃、生前の本望を遂て、幽なる住居に朝夕の烟をたてゝも、猶物すき風流の細みに富めり。子さへなくて、夏冬の寢寤もやすし、待事もなくて世を静にいとなみ、同穴のかたらひをなせる人には似たり。紅梅といふ花は、一度彼岸參の心を動かし、未開紅の光をはなちぬれども、やかて蒼くだけ、花ひらけてより、日々にねどるへ、雨風を帯、夕日にしらけて、つばめる色を失ふ。たどへば三十過たる野郎の、大躍につらなり心ならず風流をつくりたる心地をする。

渡邊支考

支考は、美濃の産にして、はじめ佛門に入りて僧となりぬ。幼くして、英敏、辭業に抽ひてければ、いたく世の人に驚異せられぬ。されど、その才のあまりに鋭き、遂に人のねたみを招き、これを陥れむとせたるものありき。こゝに

於て、かれは山門を出で、伊勢の山田にさすらへ行き、神風館涼菴が菴を訪ふて、俳道に指をそめぬ。英でたる、かれか天才い、いづこに於てか、あらはれざらむ。直ちにその味をしりて、

涼しさや椽より足をぶら下る

など、奔放の句を吟す。

正風の本領を得

涼菴の才を惜みて、これを勧め、芭蕉の門にあそばしむ。かれ、一とたび芭蕉の薫陶を得るや、正風の本領を窺ふて、幽玄を味ふ。かれ自らこれを記していはく、一とせ湖南の幻住庵に、白頭の翁を見て、才能は文字をはなれ、風雅は心をあそばしむる物なりと聞て、此翁とあそぶ時は、酒にえへる人の、何ゆへならで、たゞたもしろさこゝち不侍りける。翁のいはく、俳諧といふに三の品あり、寂莫はその情をいへり。女色美肴にあそびて、飽食のさびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繡に居て、薦着たる人をわすれず。風雅は其言語をいへり、言評は虚に居て、實をたふさふべし。實に居て虚にあそぶ

陳情文

事はかたしど、これ、かれが美濃山縣郡三輪明神を拜まて、さへげ奉りたる陳情の文のうちにいへりなり。

彼の技倆

蕉門の俳士、剛慢にして、われ尊しとするとの甚だ多し。不羈を以て、風雅にあそぶの士が、迭に他を眼中に歿し去るが如きものあるは、免れざるの數なり十哲の中、その最も豪慢にして、忌憚なく自讃の辞を放言するものは、彦城の菊阿佛に過ぐるものなけむ。その蕉門の直指、われにあらずして、たゞやこいおが如き、殆ど聞くものをして、呆然として答ふべきところを知らざらしむ。されど、かれは悪く氣なく、厭味なし。自負の念、胸にみちたる卒直の人が何の願慮するところもなく、わが信ずるところを大言して、自ら快とするものに似たり。支考が放語に至ては、むしろ、一段の巧妙ありき。かれは人を罵り、人を譏れり。また思ふがまゝに人を論難しぬ。されど、罵も、譏も、かれは正兵を以てせずして、奇兵を以てせり。かれが人を論難するや、天晴、陣頭に馬を立つて、大音に、花々しく、名のれり。敵と戦ふや、未練なく、勇ましく、戈を

交ゆ。正面より見れば、しかなりしなり。されど、一たびかれが脊後に出て、その内裡をさぐれば、かれは伏兵を以て、敵をふびやかさむとせり、征矢を放つてなやませむとせり。かれが戦法の旨とするところは、すはやきにあり、たくみにあり。否、神出鬼没、前にあるかと思へば、忽焉として、後にあり、後にあるかと思へば、突然として、前に立つ。これのれが、慣用の手段にあらざるなきか。あるひは脱兎の如くあるひは處女の如く、敵手をして、摸捉する能はざらしめしは、畢竟、かれが天賦なる術數の才、權奇の謀に富みたるによれりしなり。かれは時に紅錦袍を着け、時に玄甲を穿ち、時に黄甲を穿ち、或は鎧を以て、或は劔を以てさまざまに戦ひぬ。

神出鬼没

脱兎の如く處女の如し

東華坊

かれかつて自ら記していはく、人は萬物の上になてる物なり、その人に我ありその我に東華坊ありて、西にあそぶ時西花坊ともいへり、東西の二華は支考が坊號にして、野にある時は野盤子といひ、家にある時の獅子菴といふと。たゞにこれのみならむや、あるひは苗宰陀ともいひ、獅子の一弟子蓮二坊となつる渡白狂といひ、自ら識し、自ら驕る。

本朝文鑑

本朝文鑑の一篇手をかへ、品をかへて、放話をたくましようす。要するにかれは天才の人なり、學植もまた富みたりき。かれは非凡なりしなり、かれは豪邁なりしなり、不屈なりしなり。こゝに於てか嘲罵嫌惡四方に起りぬ。然れどもかれが俳諧の續は遂に歿すべきにあらす。ろの俳諧十論に於て、爲辨抄に於て、古今抄に於て、續五論に於て、一種の雄筆を奮つて、虚實の旨を祖述し、さまざまなる論辨をつくり、解釋を付す。かれの眼孔いゆがみたるところこそあれ、言論の牽強なるところこそ多かれ、奇矯にしてれもろく、引証のいと

虚實の説

俳諧に狂ふ

げにかれは心からして俳諧に遊びしなり。あるひは俳諧に命をかふべしといひ、あるひは詩人は詩に狂ひ、歌人は歌にくるふ、釋尊も狂ひ、孔子も狂ひ、莊周も狂ふ、われは俳諧に狂ふといふが如き、豈に自らあさむくものならむや。たれかいふ、かれは俳諧の忠臣ならずと。よしかれは功名の念あつく、徳義に

於て、かくるところありとはいへ、東に赴き、西に奔り、師の膝下に侍して、その死せむとする枕邊に奉侍したるが如き豈に輕薄兒のな一能ふところならむや。

報恩表

かれ嘗て報恩表をつくる、いはく弟子かつて双親を失ひて後は師を木曾寺にふくり置て、花の露に泣きし日より、その日々に香華を忘れず。父母の敬禮にも先ちてなすといひ。宗祇の質と云もの置き給へる風雅のためしもありと聞ければ、寧一山の自書自讃など、その外に五品の物をしろなして、こゝに供養のあるトとはなれりといひ。師翁、滅後、三年には法會を營み、七年には木曾寺に千句追善を修め、十三年には双林寺一萬句の法苑をのべ、十七年には假名の碑を建建して洛陽の宗匠をまねきぬとぞ。

俳道に萬身を捧ぐ

かれ豈た々に權奇の人ならむや。かれはげに俳道に滿身をさへげたるものなり。かれまたたつていはく、この翁とあそぶ時は、酒によへる人の何ゆへならず、たゞるもしらさこゝち侍りけると、祖翁の徳は、かくかれを薰化したるに

相違なけれども、かれもまた心からして、師に侍し、ひたすら愛慕したりしなり。凡そ才あるの人多くその才にくらまされて、義弱く、情淺し、然れども、支考は義を知れり、情を知れり。よろしく義を重せざるべからざるの所に於てはかれはこれを重じぬ。情の濃かなるべき所に於ては、かれは血涙を瀝くの人なりしなり。

同門の畏懼嫉吐

然れども、到底、かれが人後に落つるを嫌ふの性質功名をむさほる妄念、他を打破せむとする野心、あたりをなきたつる權謀は、同門の人に畏懼せられたるかほりに、また嫌惡せらるゝをまぬがれざりき。

その露川責の一書に於て、大に露川をのゝしり、また反撥せしめざりしが如き酷烈の手腕、慄然たらむ。かれ俳諧十論の劈頭、まづ喝破して、虚實の旗を眞先きに押立て、或は三皇上帝といひ、禹湯文武といひ、伊奘諾、伊奘册といひ天照大神といひ、その例をわが國に採り、漢に採り、釋氏にとり、誠に大極の道をわらちて、儒佛老莊のむかひより、虚は實をもてつくるふべく、實は虚をも

俳諧の機

てはごくべければ、孔子に莊周ありて仁義をも説き、釋氏に達摩ありて經論をやふる、いづれか俳諧の機變ならざらむといふ。淳々としてつくろなく宛も万斛の水を傾け注ぐの慨あるにあらずや。

許六野坡の評語

この權奇、この大才は許六をして、

支考字盤子號東華西華亦號獅子庵濃州之産也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師滅後遊東西南北。說風雅而助諸生。故往々慕支考風者多矣。中遇居干勢州山田後歸故國作俳諧之論

の小傳を作らしめ、仇と均しく論争したる野坡をして、かれの句を評して、袴着つめたる者の及ぶところにあらずと賞せざるを能はざらむ。而して他をして外道とよばしめ、師の俳諧を擾乱せしむるものと惡ましめぬ。

隨齋諧話にいはく、去來死後の傳書、去來妾是を秘藏す。支考、乾字十五兩出して、買得て後、翁直傳と偽り、其目六十條を作りかへて、門人を訛し、多くの金錢を食れり。十論并古今抄といふ書を撰て、祖翁の流義なりと稱して、自作

發願文

の妄談を出す事、數百ヶ條あり。嗚呼一人、其虚を傳へて、萬人實を稱す。死して、何の面目ありて、師に黄泉に見えんや。無間の罪あるべしと、以てその如何に嫌惡せられたるを知了し得む。

常時に於けるかれい、ある一方よりかくの如く思惟せられしなり。こゝに於てかれは弟子の名をとつて發願文をつくりていはく、

我は元より異境の田家に生れて、貴高の門に膝を屈め、富饒の人の手をまぶりて、人に下れば福ふに近く、人を敬へば賣るに似たり。爰に知るべし、孔子も相國の位を喜びて、人は上に居て、下にくだる事を樂ますやと。さるは官祿をよろふぶにはあらで、其道に於て其徳をひるむるには、人をなびけて自在なる故なり。我はたま〜芭蕉門に入て、俳諧の一派を傳ふるより、天下すべて我理論に推されて、眼前に我をあざむく人もなければ、自ら人の上によぢのぼりて、四方の判者を蚊虻に聞なし、一座の連衆をも兒女に見做せらるば、縦に一寸の片唇を動かして、天下の人を舌頭に挫斷すといふべし。維

れば其道は得も得たらんが、其徳は日夜に油盡き、まゝ先翁の餘光をさへ
是か爲にか、け盡くしぬべし。誠に恐るべく、誠に悔むべく、是をも勤め
さらんや是をも謹まざらんや。是れより發願の素意なればなり。我師や
すでに二十年の腸をくだきて、俳諧には三十餘集の摸様をつくり。徒然の
鼓には十五抄の註者をひしぎ、爰の木曾寺には十間韻の手向を残り、洛の双
林寺には七字の碑の供養を遂けたるに、世の人はその功を數へずして、常に
利名をむさほりてその身を飾る人なりと毀れり。

かれが不平慨嘆も理なり世の人が利名をむさぼるを惡むはよ、然れどもこ
れどもに、その功を殺し去るに至りては酷といふべし。

かれが論究的の才識は驚くべきものあるどもに、かれが吟出せる俳句もま
た奇骨稜々清肅にして洒落、人後に落つるものにあらず。かれかつて還俗の
時、

俳句
洒落

蓮の葉に小便すればお舍利かな

といひ。肉食飲酒を戒められたるとき、

牛になる合点じや朝寐夕すいみ

と謠ふ。老莊禪の虚無に陶冶せられたる不屈豪邁の獅子巷ならで、いかでか
この奇あらむ。その曲折自在にして俳諧の胡廬中に踞踏して出づること能は
ざる輩豈に夢にだもこの見地あらむや。
その句に、

俳句

二見まで庵地たつぬる月見か
粟の穂を見あくる時や啼鶉
何よりとからめかし行秋の風
煮木綿の平に寒し菊の花
ひさつ葉や一葉くの今朝の霜
野はかれてのはすものおし鶴の首
藪入の温飽うつとてかり着か
水仙や門を出れば江の月夜
おれまてかくとして春の雪
帷子のれかひはやすし錢五百

余所にれてさんすの夜着の年忘
ろの親をしらぬろの子は秋の風
様に寐る情や梅に小豆粥
うき戀にたへてや猫の盗喰
春雨や枕くつるゝうたひ本
しら雲やかきねを渡る百合の花
涼しさや様より足をぶらさげる
ふたつ子も草鞋を出すやけふの雲
一箱のへさや芋のすんさ刈
はつよりや道にわつらふ枕も
梅か香の筋に立よるはつ日哉
苗代をみてぬる森のからすか

文才

かれが文才に至りてはまた驚くべきものあり。也有かつて評していはく、考が文は、はたらきて通らず、おもしらくいひなぐりて、情を深く含ませたり。たゞへば諸藝に勝れたる當世男の一座の興に三昧取りて、相の手ばかり引給たるが如し。宜なり、縦横無盡殆んど人をして僻易せしむ。

大才の人

かれは兎に角大才の人なり。不知庵君かつて評していはく、舊門に

スフィンクス

筒の怪物あり、花に嘯き、月に戯れ、老莊儒佛を掌上に弄し、宇宙を喝破し、人生を達観し、獨り罵り、獨り諷して、出世間の文詞に隠れ、ある時は醒むるが如くある時は酔ふが如く、忽ちに罵り、忽ちに笑ひ、毅然として天下の師を以て任じ、昂然として市井の隠を以て居る。彼れ個儻任侠の士なるが如し、彼れ瑰偉權奇の徒なるが如し。彼を以て放蕩無頼と爲すも説あり、彼を以て偏執固陋と爲すも理あり。カアライルの所謂「スフィンクス」なるもの僅かに一小世界獅子門に光明を現せしも、人は目するに唯一文士を以てす。縦令彼を以てリ、ツパットの住人と見るも、一滴の水中に相吞噬する幾億万の微動物ならむや。批評凱切なりといふべし。

美濃派

されば、かれが門葉は尾濃を初めとして、北國に於いてはなはだ多し。就中美濃に於いて最も隆盛をいたし、その衣鉢を襲くもの今にさはなりといふ。

残年

享保十六年四月七日を以て歿す年六十七。

志田野坡

附合の妙を得

樗木社野坡は、越前の人にして、燕門に入つて、名聲あり。性、放逸、嘗て盜のしのび入りたるとき、平然として俳句を吟じて、かれらを驚嘆せしめたるが如き、げに俗人の豫想の外に立つ。かれが附合に妙を得たるは、越人と相並ひで賞せられぬ。かれが十哲の一人たる伎倆を有せしは左にかゝぐる許六との應答により知るべし。今左に野坡が許六の文に答へたる書翰をのせむ。

前文略

一、翁古池の句、貴丈ならては聞得るもの天下になかるべきよし。一かるを今天下に名句といふは、俳諧せぬものも申候。素堂も四句の名句の内に撰出し候事、集御覽にて御存可有、翁自名句と觸玉ふにや、又其許が名句と聞玉ふにや、不審千万にて候。翁の口より此句名句に承らず、其許よりも承らず、斯く日々に交通致候、拙者如斯にて候へば諸國の人、猶更のことにて候。去を天下に聞くものなくて、誰か名句といはんや、此句の意は翁によく

許六を難する

承り置候との先年其元へ物語申候。されど、いか、翁の説かれしやとも御尋をなく、元より我も翁の稱美にあつかりしとも、御咄もなく候。定めて高ふり我をどいれ、句意を書あらはさせて、我ものにせんどの謀と存候。其角、嵐雪を始、素堂、杉風其外、此句を聞得ざるものは、翁に句解を聞得る者は、稱美せられ候。江戸の門人杯、一人も合点不致者はなく候。北枝も先年昇りし頃、咄合候に、よく聞得申され候。李山も翁に聞申されよし、其許は、いまた聞給はさる事の事、明白にて候。さればとて聞得たる人を知り給はず、何を聞、是なりと極置候や、甚無覺東候。一分は格別、門人衆中へ譯もなき事など傳へられ間敷候。翁の名玉に、瓦の土こしらへを説に同しうして、罪深かるべく候。

一、北枝、月の句嵐雪風前書忘たるにて候。我罪にあらず、乙洲には我等かたにて前書見せ申候。

一、兎角掛合なくては發句に不成と、度々仰承り候。如何踏違ひ候や。涼

菟か風の一日吹て居にけり。嵐雪が黄菊白菊其外の名はなくもかな。北枝か我友は今年も月にあか一鬼。如柳かいつの間に背戸の木樨は咲やらん。是等の句は無名庵において、貴丈、惟然、去來、正秀、予、落合候時、斯る大道の句、得たき事なり、彼等は上手なりと翁の譽たまふ、一座感心、其許も感心せし其一人ならずや。迎も此上手の場はゆかぬと決定して、下手の下手に合ふ處を高ふり申され候や。合點ゆき不申候。あかくと日はつれなくもの作も、日と秋の風を掛合て、翁の案し申さるにや、片はら痛く存候。他門の笑ひ氣の毒にて候。

一、奉行の鍵に、誰もかくる、たれものもの字前へかゝるとて、翁の悔み給ふよし。是は其許の空言にて御座候。翁の交通、今に我所持せり。着連立の袈を誰もといふにて受たるものなり。斯る所、工夫可有と翁の直筆、今にあり、さるにより信仰して、門人にも語り候、何の罪なるや。其文も深川の出来一時分にあらずや、幻住庵より附合の事、何角たつね候答なり、悔み

給は、何予かくるしへ給ふべきや。

一、北枝か、くくる、や夕日のこれる原くらし。此句は御聞取被成がたきよし、西行の甲斐か根のふもとか原はみな暮て夕日のこれるはつしかの里。この歌を以て作り候故、甚面白く感するなり。明月の吟を被成候口にては、貴丈杯此句一生なるべき事あらず、加賀に北枝といへる作者あり、翁も譽め玉ふ事あれども句聞ありとは譽め玉はず候。舟涼し吹かれて居れば吹にけり。追わけて尾上にさかん鹿の聲。帆柱にならふや霧の向嶋。北枝ならではかく自在にするものはあらじと、無名庵にて稱し給ひし事、貴丈も其座にありて聞申されすや、誠に今の名人と申か我が誤にや。大笑くく筆止。

十月五日

許六丈

野坡

鋒先鋭く、わたるを幸ひ進ぎ立つる森川許六が剛勇の文句を捉へ來つて、一々

菊阿佛も
苦笑せむ

論駁し去り、翁の名玉に瓦の土こしらへい説に同じうして、罪深かるべしと冷評し。此上手の場はゆかぬと決定して、下手の下手に合ふ所を高ぶり申され候やとめざけり。他門の笑ひ氣の毒にて候と罵り、大笑して筆をとらむるもころ、さすがの大剛菊阿佛も頭上に針をうたれて、われをらす苦笑せしなるべし。

高津翁

かれは晩年、師の無名庵を高津に移して、自ら高津翁と號し、老吟になり候へば寄せ物、取合物は、忘れて俳諧に遊び候より外たのしみ無御座と、嘯きて風月をたのしみたりき。例により、その俳句數首を左にゝるさむ。

はき除掃してから落る椿が
苗代や仁王のやうな足の跡
ちり椿あまりもろくに續て見る
さの頃の垣の結目やはつ時雨
みなくくに咲ろろはれと梅の花
七草や粧ひしにかけて切刻み
猫の撫初手から鳴て哀れなり

うくひすや門はたま〜豆腐賣
祭まであそぶ日なくて花見か
食の時みあつまるや山さくら
法度橋の垣より内はすみれかな
衣更十日はやくは花さかり
思ひたつよし野の人も花見か
翁の旅行を川崎まで送りて
夢畑や出ぬけてもなほ夢の中
盆の月ねたかき門をたゞさけり
人聲の夜半を過るさむさか
はつ雪にさなりを顔て敷けり
行雲やねておて見るや夏座敷
しつかには啼れぬ雉子の調子哉

北枝

左工次郎
左衛門

北枝は、加賀金澤の磨工にして、名を次郎左工門といひ、兄牧童と俱に芭蕉の俳風を慕ふ。性放逸にして、磊落、頗る俳才あり。師、芭蕉かつて、

あか〜と日はつれなくも秋の風

の句を得たり。行脚の途次、金澤に至り、秋の風を變じて、秋の山となし、北枝にしめす。北枝一誦、直ちにいはく、山の字、これを替ふるに風を以てせば妙さらに一段を加へむと。芭蕉大に驚異していなく、われた、御身が俳才を試みたるのみと。とに於て、翁いはく、北國に北枝あり、この道これより知られむと。かれが俳才はすでにこの時に於て、師翁の腸をくゞりしなり。

師の俳協
を説ふ

既落曉塵

かれが風雅の境に遊ぶで、世の利欲をかへり見ざりしは、或夜、友を集へて俳諧を競ひけるに、盗入りたるときの一小話にて〜らるべし。座につとひたるもの興ます〜す、みて、われをわすれたる真夜中の頃、盗、籬を破りて、什具衣類を偷み、まさに去らんとするを聞きつけて、その物音をあやしみ、北枝につぐるものあり。その時、北枝笑ふてかへりみず、

世間咄〜に茶がまち〜

といへる前句に

盗人の目にかけてらるゝめでたさよ

と附たり。

また元祿の年、金澤に大火あり、北枝が家も、また類焼す。訪ひ來る客多しこの時、

焼にけりされども花はちりままし

と吟して自若たりしなど、優に脱俗の資あり。この風流ありこの吟ある所以なり。

俳調

かれが俳調は少しく卑俗にかたむきたれども、自在にして趣味深し。左に數句を示さむ。

七くさや唱歌ふくめる口のうち

山吹やおぼれし泥に上かはき

鶯やつとふてありぬ梅の花

田をうりていこゝ寐られぬ蛙哉

夕風に何吹あけておぼる月

しら露もまたあらみの、行衛哉

一田つゝ行めぐりてや水の音
しくれ年は又松風の只をかす
柿の袈裟ゆすり直すや花の中
くる秋は風許りてもあかりけり
虫ほしや暮をふるへば櫻花
夏酒や我このりあむ火の車
帆はしらのならぶや霧の向ひ鳴
かれあした手かゝりにして水哉
竹齋て酒にかへはや露時雨

歿年

享保三年五月十二日死す。一代の著、花月傳、北枝傳、金言抄等あり。

門人希因
北地俳諧
の祖

門人希因、鳥翠の號をうけつぎ、餘流北陸の野にあまねし、げにこの地に於ける俳諧正風の祖なりとぞ。

越智越人

性純良

越人は、尾州名古屋に住ぬ。この人、性純良にして、師翁が教訓を体し踰ふることなく。その支考が權略の才筆を揮て、俳諧の論數篇を著はし、天下を風靡せむとするの大野心を見るや、越人、憤怒に堪へず、師、滅後、直ちにかくの

不猫蛇の
書を著し
て支考を
離す

如き妄説を告白して世をわざむくは甚だ惡むべしと。遂に不猫蛇の一書を著して、その妄を辨し非を説いて餘力をあます。

註明

この純白なる越人、いつごろにやありけむ、一種の艶聞を世に漏しぬ。口さがない同門の人かれふれいひはやしたれば、遂に師翁の耳に入りぬ。佛の如き芭蕉、いかでのこのまゝになすべき、中心大に越人を賤めて、またその庵に行かず、交情いと疎々しうなりぬ。越人こゝに於て慚愧、交も至り、
羨まし思ひ切る時猫の戀

玄々の
評

の一句を詠いて、師が許に送りぬ。師もまたこれを見て心打解けぬと傳ふ。玄々一これを評して、色は君子の慎む所なれど、又玉の卮に底なきもうとまじさればこの両端を叩てその程を知れること、是が北の人の風流なるべいやと評す。竹内青人も、また情を解するの人ならずや。かれが俳諧はすがたやさしく、情濃かにして、味いとゆたかなり。

俳調

名月や夜明くる際もあかりけり

雨の月何處さもあしにうす明り
 山寺に米つく音の月夜かな
 余の木にも紛れぬ冬の柳かあ
 ゆく年や親に白髪をかくしけり
 かもしろや理屈はなしに花の雲
 山吹にあふあき阻のくつれかな
 春風に帯ゆるみたる寝がほかな
 見返れハ白壁いやし夕霞
 花に埋れて夢よりすぐに死をん哉
 行燈の滅けは寒き雪のくれ
 藤の花たうつふひて別かか
 下々の下の客さいはれん花の宿
 蠅のひかりにくしやほこまきす
 はつ雪を見てから顔を洗けり
 稗の穂や馬遊したる景色かあ
 何さやらあがらば寒し梅の花
 撫子や蒔繪かく人をうらむらん
 若菜つむ跡は木を割畑かあ
 名月や杖に水なふる墨田川

梅の花もの氣にいらぬけしきかあ
 聲あらば鮎もなくらん鵜飼舟

素堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる藤のみか

杉山杉風

江戸の人 杉風は江戸の人にして、芭蕉がはじめて江戸に下りたる頃より、その風を慕ふて、近侍しぬ。家、魚をひさぎいと富めりきと云ふ。この故に芭蕉が深川に庵を結びたるも、小石川水道の工を替せしも、皆杉風が周旋の功によれり。その俳句を左に記して、その風体を示さむ。

扇形舟上野の櫻散りにけり
 たつればや古葉がもこの獨活のもえ
 風なくてしつか過たり藤の花
 むつくりさ阻の枯木もかをみけり
 磯巻に首引入て冬の月
 かつくりとぬけそむる齒や秋の風
 子や待たんあまり雲雀の高上り

枯はてゝ霜にはらすやをみるへし
 一鹽に初白魚や雪の前
 菊刈や冬たく薪の匠所
 影ふた夜たらぬ程見る月夜かな
 紅燈の娘すまする妻戸かあ
 めつらしや内で花見のはつめじが
 桃灯の空に詮をしほこゝぎす
 手をかけておらで過行木権かな
 桶や定家机のありささる
 菊刈おくある霧のくもりかな
 このくれも又くりかへし同じまこ
 冬籠り夜露竹の嵐かあ
 年のくれ破ればかまの幾くたり

享保十八年、八十餘歳にして死せりといふ。

第九章

江戸の俳諧

余等は芭蕉及び蕉門十哲の記述を完了したれば、讀者は略、正風の本領、果して那邊にあるやを知りたるならむ。而して余等が、ふれより進みゆかむとする道路は、最も簡短なる筆法を以つて、正風の俳士を叙述し、益その本領と傾向と變化とを會得せしむるにあり。而して第一着に来るべき方面は、江戸の俳諧にあるなり。

凡そ一國の流行は、都會の最もはなやかなる、最も、にきはしき、あたりよりありて、遂に彼方、此方のはてまでも波動するものにして、はじめ俳諧の蓄は、京都、浪華の間に結びそめ、うつりて、江戸に至り、三都の風潮相結むで柳絮飛び、花滿城なる陽春三月の天地を開きぬ。かくて餘香あたりに薫じわたりなり。

今より凡そ二百七八十年前、美濃の徳元、貞徳より俳諧を學び、あづまにくだ

徳元は江戸の祖

江戸の俳諧

未得
俳諧書上
りたるるるど江戸俳諧のはじめなるべき。よの時、石田未得も江戸にありけるが、同じく貞徳の俳諧を學びぬ。寛永十八年、徳元、俳諧幼學抄を編みぬ。みれ江戸に於て俳諧書、梓行の權輿なりき。

季吟來る

寛元四年
宗因東下
芭蕉派リ
て五霸を
一統す

その後、北村季吟、幕府の召により江戸に來り、小川町に拾穂軒をむすび、また俳諧の嗜好を傳播しぬ。みれ徳元が東下に後る、凡そ廿一二年なり。かくてその後、田代松意、杉田正友等、談林の新調を唱道し、寛文四年、西山宗因、東下のとあり、江戸の俳諧、一生氣を加へぬ。

江戸座と
雪門

同じく十二年、松尾桃青來り、延寶、貞享、元祿の間、いきりに正風幽玄の旗幟を翻し、五霸を一統しぬ。よの時、蕉門の俳士、甚だ多く、俳諧の中心點は、江戸にありなり。江戸の俳諧は、俳壇の亞聖ともたへつべき榎木其角、服部嵐雪の二光明によりて、代表せらるべし。其角が流をくめる江戸座、嵐雪が衣鉢を襲く雪門、驚くべき勢力を維持して、何に至る。また小川破笠の如き、山口素堂の如き、杉山杉風の如き、江戸俳壇に名を列すべき風雅の士なり。

破笠素堂
杉風

余等は已に貞徳門と檀林派との俳士にして江戸にあり人々を大略記述し了せり。山口素堂、杉山杉風の諸子またみれを記述しぬ。みれより其角を祖とする江戸座、嵐雪を祖とする雪門を略記せむ。

江戸座

湖十

湖十。其角が豪快なる俳燈を傳へて、寶晉齋をつき、所謂二世の稱あるものを湖十となす。深川に住しぬ。幼にして選山、後また老鼠、鼠肝などいふ。性、粗豪、磊落、白日奇異の法服をまとい、頭陀をかけ、大道を濶歩して、恬として慙ぢす。その圓顛にして、尺余の長髯を風になびのせるさま、行き來ふ人の眼をひき、往々嘲笑せらるゝもかへりみず。酒を呑むで得々放吟す。よの性已でに晋子か統を襲ぐに足る、その吟また味あべし。

熊坂の長刀あふる霜夜かな
腹がけは母の教への寐巻かな
梅が香やわきてしのめ井の煙
しばらくは雪の念あし桃の花

秋色

よの人、元文三年六十余にて身まかりぬ。
秋色。かの女は上野観音堂のかたへなる井端に、秋色櫻の美稱を遺し、百有余年の今日、都人士をして嘆美稱讚措く能はざらむ。十三歳の妙齡なる少女が、胸裡の風雅、すでに三昧に入り、観櫻のときわれしらす、

井戸端の櫻あふなし酒の酔

のあやしさまで、妙なる句ありし所以なり。

かの女は江戸の産にして、菓子商に嫁きたるが、常に其角に近侍してその教をうけぬ。

句体、優婉、女流の氣をらしなはず、清らかに、あどけなくしかも巧にして人を驚異せしむ。宜なり、一婦女をもつて、俳諧の判者となり、風雅界に推重せられたるや。

らのふの紅葉にありす女は
獨居やしのみ火鉢も夜半の伽
翠簾さけて誰かあふん涼舟

辞世

見しゆめのさめても色のかきつばた

かの女は、父に至孝なるをもつて、また性のきはめてさかしく和しきを以て、稱せられぬ。享保十年身まかりぬ。

貞佐

桑岡貞佐。はじめ緇衣の身なりだが、俗に還りて、平三郎といふ。其角の門に入りて、平砂といひ、また貞佐とあらたむ。桑々軒と號す。性、篤實温厚、大高子葉、神崎竹平等と交、深し。元祿の年、大石等四十七士、吉良家を襲ふて主仇を報するや、貞佐、愴惶、高輪に至り、某候より賜りたる羽織を以て、酒一樽にかへ、走せて泉岳寺に至り、歎極りて大呼し、子葉等を招き、酒を送り、その志を壯として去りぬとぞ。

句体、妙をきはむ。

出て三日人なら如何に猫の戀
鯨の目不便に見ゆる牡丹か
神風やこはると孕む稻のはら

芝海老の髭も鬚にも出る神無月

辞世

中枕に白粥み、つる十三夜

みの人享保十九年九月、六十五歳にて歿す。

超波

門人に、清水超波あり、はじめ味噌商人なりしが、後貞佐か門に入り、獨歩庵と

平砂

號す、また一箇の奇士なり。
また皁月平砂あり、博學の譽れありき。

水鳥に寒まけあし初がつほ

超波

野遊も鈴も穢に出る茅鍼かあ

同

月雪やさありの塵にハ舞迎如來

平砂

千金の直ほどにちるや花の友

同

淡々

松本淡々。其角の門人なるか、京にのぼりて、半時庵、淡淡と號ま。祇園のかたほとりに住し。大に名聲をかゝやかす。性豪邁奢侈を極めて、人目を驚かす。江戸浪華に門人多し。

浮盤は蓋に蜘蛛の冬ごもり

原松

寶曆十一年、八十八歳にて歿す。山口羅人も、はじめ、この人の門に入り、後貞徳風をしたと。原松。色人。など、みのろの其角門の俳士なり。原松は、性は加藤、常陸の人、狸々庵と號ま、専ら禪を修め、好むで酒を呑む。寛保二年に死しぬ。

背面の達摩の畫に

あちらむけ酒がいやら寒の餅

布袋和尚の圖に

小袋に大千いれて花ごころ

骸骨の畫賛に

墓原つ秋の聲のふたつかつ

早野色人は、はじめ竹雨といひ、鄧月泉、夜半亭の號あり。

往くは鳥と盜賊の木芽か
白藤や風に吹る、天の川
一夜づゝさびしき替る時雨かな

また、かの名高き紀伊國屋文左衛門父子も、其角の門人なりき。

余等が記述したるとよろを以て、其角が流をくめる俳士の如何なる風体なりしかを知り、その色彩の他に比して、一段江戸風の面目あるを知るべし。

雪門

江戸座と相并むで、盛なり一派を、雪門となす。嵐雪が、豊かなる學植、精妙なる俳句、和暢なる性質は、當時其角と俱に芭蕉門下の二大光明と稱せられしが、その門につとへる騒客甚だ多く、所謂雪門の一派をなし、流水、滔々としてきはまるとよろを知らざるが如きものあり。遂に俳壇の萎靡を挽回したる大嶋蓼太を出すに至りぬ。

嵐雪歿後、その統を嗣きたるを吏登となす。

吏登

櫻井吏登。は、江戸の人、はトめ人左、或は班象と號し、嵐雪が門に入りて、俳

吏登周竹
互に譲る

諧を學び、頗る妙を得たり。嵐雪歿後、その點式は同門に年久しくありたる周竹が譲りを受くべき、はづなりき、さるに周竹いなみて肯はず、直ちにこれを吏登に渡して、懇ろにその統をつぐべきをすゝむ、吏登もまた聽かず、周竹いはく、二世雪中庵たらむは、弟子の身にとりて、此上なき光榮なり、われまたこれを望む、されど老耄のわれその氣力なきを如何せむ、それ天下の雪門を御して、儼立せむものは、よろしく貧を意とせず、權門に屈せず、奮進してたゆまざるにあらざるべいかでか能むや。子、年、壯また、その器を有するはわが知るをよるなりと。よゝに於て吏登第二世の雪中庵たり。

周竹が言あやまたず。吏登老後深川に居るの時、清貧をたのしみ、古書を友とし、わづかに膝を容るゝの小室に蟠居して優々風雅の境に遊ぶ。句、師の衣鉢を襲ぎて、二世雪中庵たるにはぢき。されど謙恭の性、甚しく自詠の句、採るに足るものなるとして、數年の稿を一炬に付して、題みず、わづかに十有八首をのゝぬとぞ。

大竹や人はねむたき五六月
花すゝき夜はほのくさ明あから
梅咲てあたり春はあかりけり
老の秋明六を聞くおもしるさ

墓太

大島墓太。雪中庵第三世を墓太となす。空摩居士。俳諧、精妙にして、
駿遠の間に門人多く、また白隠禪師につきて悟道に。俳諧に於ける績甚
多し。嘗て清人某、墓太か、

さみだれやあるよひそかにまつの月

の一句を聞き、感歎措く能はず、書を送りて、讀まいはく、墓太先生は隠君子な
り、都人士以て金馬侍従の流亞となすと。わが國に俳諧なる一短歌あるを、支
那人に知らせめしは、大島墓太の功なりとす。

墓太、學識超凡、編著するところ六十有余部あり。余等は精細なる記述をなさ
いれども、讀者は墓太の名を記憶して、忘るべからず。墓太、天明七年九月七
日歿す。年七十、粟津寺、傍塚のかたはらに墓ありといふ。

名月やうまれかはらは峯の松
白雲や散るとき花のよしの山
追れては月にかくるほたる哉
こもゑ火を見れば風有よるの雪

自像自讃

たましひの入りもひとつたれふくへ
ふりかへる女心の汐干かあ
縮ふさいて二重のぬま主かあ
世の中は三日の間に櫻いあ
橋ひとつ出づらに寒し更衣
花み雪釣るもあらまほし
旅寐して　　にも秋のくれ
杜若は　　も　　咲にけり

その他江戸の俳諧に名を列すべきは、不卜に學びし、
立羽不角。あり。また蕉翁の俳諧を學び、馬光等と五色墨を編み、日本橋のか

た得どり浮世小唄に松露庵をいとなみたる、
長谷部柳居。あり。またはじめ、露言に學び、後蕉門に遊び

小川破笠。あり。

うの他、春空、祇空、玄武坊などあり。余等はその俳句、數首を録きて、この章を終へんとす。

乞食にも斯はならぬ案山子哉

破笠

妻にもと幾入おもふ櫻狩り

同

空蟬は春の禊に返しけり

不角

けし坊主木の端でおし草の端

同

青柳や二筋みすぢ老木より

柳居

淋しさの極意はれむし閑呼鳥

同

京都、近江

東山、嵐山の風光、いつれのこの地の民をして、優美ならしめこらむ。されば、俳諧の創始も、松永貞徳によつて、この地に開かれぬ。蕉翁、正風の俳諧を以て、四方を薰化するや、落柿舎の去來あり。また史邦あり。琵琶湖畔の近江には、正秀あり、千那あり、智月尼あり、木節あり、李山あり、曲翠あり。俳諧の流行、此だ隆盛にして、明治の今日に至るまで、風雅に遊ぶの士、いとさわり。余等はこの地に於ける蕉門の俳士、兩三を略記せむと欲す。

曲翠

曲翠。は、膳所の士。馬指堂と號す。蕉翁と相親しみ、風流の三昧に入る。嘗て奸臣あり、わが仕ふる君側にはびこり、民、大に苛政に苦しむ。曲翠ふれをみて、憤懣に堪へず。奸臣を一刀に斬殺し、己れも、心静かに自殺しぬ。ふれ享保八年の事なりき。奇傑の士といふべし。その俳句には、

念入つて冬から春む山茶が

思ふ事だまつて居るか蟻除

鳥呵る聲も枯野の風かな
すみれくさ小鍋あらひし跡やこれ

李由

李由。は、亮隔上人といひ、堅田の律師なりけり。許六、支考と友としよし。

千那

幻住庵に於て、蕉翁に侍し、大に俳諧を學びぬ。寛永二年に死すといふ。
千那。も、また堅田本福寺の律師にして、蕉門の光輝を稱せらる。また大津の
俳士、乙州か母に、

智月尼

智月尼。あり、閑静幽遠なる俳調を以つて、女流俳壇の名家たり。また、

木節

木節。は、大津の人にして、弱冠の折より、蕉翁にしたがひ、學ぶ。翁歿せむと
するや、いと戀なる看護をなしぬとぞ。

今、これらの人々の俳句、數首づゝを記すべし。

橙や疋氣をさまる御代の春 李由

はる近き三年みその名残かな 同

水涕を明切て行吹雪かな 同

朝寐して出れば小春の天氣かな 同

蓬坂のかたまる頃や初櫻

千那

それくの圃の形や梅柳

同

高灯籠ひるは物うき柱かな

同

鶯に手元やすむる流しもこ

智月

ふれであり命惜けれ櫻花

同

我形も哀に見ゆる枯野かな

同

わが年の寄さもしらす花盛り

同

木からしや色にも見へず散もせず

同

山つゝじ海に見よとやけふの月

同

廣庭よゆたかに咲て牡丹かな

同

夢葉の家してやうん雨蛙

同

年よれば聲のかるゝそきりゝす

同

待春や水にまじるちりぬくた

同

花咲くもむづかしげある老木哉

木節

名月ややよひは女の聲ばかり

同

輝は竿にかゝせつ冬こもり

同

北陸

北陸の地には、正風の俳諧いちはやく盛榮を極めたりき。加賀に、北枝あり、勾空あり、秋の坊あり、萬子あり、牧童あり、千代女あり。能登に惟然坊あり。越中に浪化あり。余等をしてこの數士を略記せしめよ。

勾空。は、柳陰軒と號し、卯辰山に閑居し。蕉翁にしたゝみ侍して、深く風流の境にあそびぬ。

秋之坊。も、また風雅の士、世を遁れて、清貧を樂しみ、死後米錢を殘すは、徒に人の累を益すにすぎずとて、居に一具たもと、ひとと氣遣ひたるが如きまた以てその卓落なる性行の一斑を知るべし。

萬子。性、生駒、金澤の富豪なりき。一たび蕉翁に逢ふて風雅の道に入る。常に北枝等と相親交し、しばしその急迫を救ひぬ。俳句妙所に達し、甚だ儕輩の間に敬せらるる本朝文鑑に、翁か友に萬子、幸堂ありと書せるを見れば、おながらに蕉翁の門下にてはなかりしならむ。

牧童。ば、北枝か兄にして、その俳句、正風の旨を得て、精素なり。その性きはめて磊落なりき。されば支考も評して、素より謝公か才能を争はされば、嘗て阮家の富貴を羨まずと賞す。

千代女。は、加賀松任の人、女流俳人の名家として、うの機密婉曲なる俳句の噴々として人口に膾炙し、今日に至りても、如何なる没風流漢なればとて、その朝顔、初ちきりなどの句知らざるものなし。園女と相並んで、わが俳壇の双美と稱せらる。かの女は、幼にまて風流の志あり。支考に學び、後盧元坊に學びぬ。福岡氏に嫁して、間もなく、その夫に歿せらるゝや尼となり、専念、俳諧の境に逍遙す。妙へなる句は、ものにふれ、事に逢ふて、ゆくりなく彩霞を吐きぬ。彼の女は俳句に於て、尊敬欽仰すべき價值を有するのみならず、淑良溫和なる良妻として、艶麗なる美人として、閑雅なる畫工として、ながくわが園秀の模範たるべきなり。安永四年九月八日、よのうるはしきかたみを世に遺して、寂然として歿しぬ。年七十有四。

惟然坊。は、能登の奇士なり。蕉門に遊びて、風狂もつて、自らゐる。もと富貴の家に生れたれども、ふれを捨て、願みざると土芥の如く、破笠を戴き、放吟、縦横、願慮するところなし。嘗てある人我家にて、今宵俳筵を開けば、子請ふ來りて俱に風雅を闘せ給へといふ。惟然、空嘯きていはく、われ起居坐臥ともに俳諧に遊べり、何を事々しく俳筵につらなるの要あらむと。ある時、伊達摸様の振袖を着、早起して野邊をさまよひ、盗人と間違られたるなどはめて奇しくもまたふかしき話あり。ともにも坊のさまを想ひ見るに足らむ。

僧浪化。は、越中、巨波、瑞泉寺の僧にして、東門主大僧正の親族なりしとなり。蕉翁に邂逅きて、風雅にあそび、その句集白扇集には、秀逸いと多し。元禄十六年、歳未だ壯にして、寂滅しぬといふ。

北陸に於ける正風の俳士、大略如此し。余等はふれよりその俳諧數首を味はむとす。

疎咲て庵の襟になかりけり 勾空

折角と床しびらせよ月の雨 同
 梅が香や分入る里は牛の角 同
 凍つきは凍つきながら笹の風 秋の坊
 正月四日よろづ此世を去によし 同
 吞棹に三日月かゝる櫻かな 萬子
 岩ふんで一月くの櫻かゝ 同
 輕遊をまうし盡して歳暮かゝ 牧童
 蚊柱のきはほのくこみかの月 同
 蜻蛉つり今日は何處まで行たやら 千代女
 百ちりも莖一筋の心より 同
 朝靨や地に咲かさをあぶあがり 同
 透かろかしらねど柿の初らきり 同
 起てみつ寐てみつ蚊帳の廣さかな 同
 二つ三つ夜に入さうな雲雀かな 同
 蝶々や女の道のおこやさき 同
 時雨けり走入けり晴にけり 惟然坊
 彦山のはなはひしく小春かゝ 同
 梅の花赤いはあかいはあかいはの 同
 長ぞ、松風の松風寒いぞや 同

分入は某處の壁や雄上川	浪化
春待や机に描ふ雪の小口	同
牛馬の臭みもよくて時雨かゝ	同

美濃、尾張

余等が、ふれよりその簡單なる記述の筆を染むべき、方面を美濃と尾張となす。

この地、また正風俳諧の隆盛を致したるともろとす。就中蕉門の大奇傑、東華坊支考、美濃に出で、その瑰偉豪宕なる論鋒と犀利幽妙なる俳調とを以て、尾濃、加、越、能の野を風靡し、こゝに美濃派なる俳派を儼立す。その流をくむもの綿々として絶へず、今に傳はる。

また俳諧の奇士、露川名護屋に出で支考と相對立せむとして交も論議抗争す。されば、美濃の隣國なる尾張も、その感化によりて、いたく俳壇にぎはへり。ふの地の俳風は、美濃派に薰陶せられたるところ多く、また露川の俳風を加味したりき。かの秋陰齋の如き、白梵庵の如き、存古齋の如き、長生庵の如き

ふの薰陶により、産出せし名手なりき。後、士朗、曉菴の如き名家出で、また横井也右の如き文傑現れ來り、儼に一團を形造りぬ。

支考が、美濃派はいたく榮へたるといふも、露川はこれを心よきとせず相論議せしと前に記したるが如し。さらば、露川とは如何なる人ぞ。

露川坊

露川坊。は、伊賀に産れたる人なるが、一たび蕉風を味ふて、その秘奥を悟得し、後世名家の稱を擅にす。金澤の北枝またこの人を推重きて、護城に露川ありと讚す。支考、その權略の才を奮ふて、師歿後、思ふがまゝに俳壇を濶歩するや、同門の人火にこれを惡む。而して、露川は最もこれを嫌惡したりしなり。されど露川も、また狡智を以て、私説をかまへ、異論をととなへ、師翁を無みせむとす。こゝに於て支考も、またいたく露川を惡みたりしなり。この相互の嫌惡は、衝突しぬ。遂に支考が露川責となり、その嘲罵を解かむとして露川また合相楔を著す。然れども遂に支考が、大才に敵する能はず、殆ど敗走したるが如きさまありき。要するに余等は露川を以て、俳壇の一奇士と稱するに躊躇

せざるなり。

また、この地に於ける蕉翁門下に杜國、荷分あり。

杜國

杜國。は、鋸を業とし、萬菊丸と稱す。

荷分

荷分。は、姓は山本、榎木堂と號し。橋守の一書を著して、師翁の勘氣を蒙れり。余等が次に記すべき俳士を也有となす。

横井也有

横井也有。は、安永、天明の間に、出でたる一大文豪なりき。尾張侯に仕へて、重臣の職にあり。孫右衛門といふ。かれは俳諧に於て、師とするところなし、小兒の舌いどろにいひ出せるが、おのづから五七五の調をなすべし、と放言す。その氣宇凡庸の想像以外にありき。されば、かれが天與の詩才の、かれが俳句をして、自在にして、精到ならしめたりき。而してかれが散文は、最も著しき名譽をになふに足れり。その鞆ごころも、浦の海、野父談、悉くその源を芭蕉の俳文に發し、縦横自在、變化出歿、わが文學界の大偉觀たるに足れり。筆のゆくところ、さけまるなく、つくるなく、而もその思想のすこやかなるは、余等

をしてそごろに敬崇の念を惹起せしむ。

わたましや先へ來てぬるきりくす

露川

行くし鳴や櫓の音馬の鈴

同

有てき角あもしろや蝸牛

同

草刈の道くこぼす野菊か

同

蓬萊や御國のかざり檜山

杜國

足跡に櫻を曲る菴二つ

同

馬はぬれ牛は夕日の村時雨

同

谷おさもしづかにかざす櫻か

荷分

いはけや居蘇なぬ初る人次第

同

とし毎に鳥居の藤のつばみか

同

草の葉や足のなれたるきりくす

同

あさかほの白きは露も見へぬあり

同

鹽魚か齒にはさかふや秋の暮

同

陽炎や取つきかぬる雪の上

同

つまなしと家主やくれし女郎花

同

家買てこそし見初る月夜か

同

秋の暮いよくかるくなき身哉

同

蓮池の深さわする、浮葉かな

同

いつの月も跡も忘れて衰なり 同
 生娘の袖誰が引て雉の聲 也有
 蛸蛸いつまで草にかくれけり 同
 化物の生跡見たり枯尾花 同
 藍顔やごちらの露も間に合す 同
 松風の里何處までも門飾り 同

伊勢

伊勢は、俳祖、荒木田守武の産地にして、盲俳人杉田望一も、またこゝに出でぬ。如何でか俳諧の花、咲きみだれ、香氣を四圍に放たざらむや。たゞにこれのみにあらず、才女園ありて、風雅を以て天下に鳴る。かくて神風館涼菟、麥林舎乙由出で、伊勢風の一派を儼立しぬ。

園女

園女。は、伊勢松坂の人にして、才學豊富、有髯男子をしてそゝろに慚愧せしむるものあり。また和歌をよくし、後ち美津女に學びて俳諧にあそび、芭蕉に従ふて、その三昧に入る。一時軒が妻となり、夫、死して江戸に來り、眼科醫を業とす。性卓落にして、またきはめて男々し。雲虎和尚に參禪えて、悟道に入

る。句をいひ、歌を綴り、遊候事に候、無益の口業ならば、一切經も、無益の口業にて候、法臭き事は嫌にて、我平日の行は念佛と、句と、歌となり。極樂へ行はよき。地獄へ落るは目出度しなど放言す。その識見の非凡なるを想見すべし。

涼菟

涼菟。は、通稱を岩田權七郎正致といひ。伊勢山田の神官なり。園友齋、神風館など號す。深く守武の俳風を慕ひ、これに正風の幽遠なる俳味を加へて、一特相を形造り、精妙にして飄揚なる秀逸を吐出す。その死に臨むで、なほ俳句に心を勞したるが如き、敬すべきこの道の名人なりけり。

乙由

乙由。は、涼菟と相並むで出で、菟死するやその跡を襲きて、伊勢派を儼立せしめ、麥林舎の名を、後世に傳ふ。かれもまた神官にして、性を中川といひ、俗人の交を嫌ふて隱栖の静けさを愛ま。のちにはわれ沙門にもあらず、俳諧師なり、俳諧の清新ならむとを欲せば、遊里に交りて、興を味はざるべからずなど、いひて晩年に至まで、狹料の巷に彷徨しぬとぞ。その句躰、涼菟に比して、

さらけ自然に、さらけ飄逸にして、また正風の絶唱とたゞゆるにたるべし。而して附合に於ては、當時かれと比肩するものなかりしといふ。その子に麥浪あり麥林舎をして、ますく繁茂せしめ、伊勢の俳壇はにぎはへりぞぞ。

また、

梅路。あり、俳諧を好み、守武を慕ふ、附合に巧にして、加賀のあたりにはあの人を師としたるもいと多かりしといふ。涼袋もまたあの人、薫陶を受けたりき。

余等は伊勢派の飄揚自然なる俳諧を味ひみむ。

夏た子に髪あぶらるゝ唇かあ 園女
夜あらしや大閼様の櫻狩 同
有程の伊達しつくして紙子かな 同
手なのべて折ゆく春の草木かあ 同
身の上を只しほれけり女郎花 涼菟
うれも靡これも應なり今朝のはる 同

嗽さけて呵りに出るや桃の花 同
合點じやうのあかつきの子規 同
大勢の手にあまりたる螢かな 同
登る月や濡色霞む伊勢の海 同
いさ櫻おもひたつ日はくもるこも 同
傾城の島見たがる董かな 同
さては夢ほこぎすにてましますか 同
さしあたる川も先づなし夕涼み 同
つかむ手の裏を這たる螢かな 同
あら寒しあこぎくこ啼く鳥 同
行秋を道くまぼす紅葉かあ 乙由
よき物を笑出したたり山櫻 同
閑古鳥我も淋しいか飛で行 同
浮草や今日はあちらの岸に咲く 同
はてはみみ扇の骨や秋の風 同
月花の目を休めさやほこぎす 同
よしの見た笠うちやまし花の雲 同
荒壁に葛のはじめや飾繩 同
颯昇の肩に覺へや衣がえ 同

補遺

余等の簡略なる筆を以て、正風の俳士を記述し去りたり。然れども、余等が、
なほ記せむと欲して、記する能はざりしもの甚だ多き。而してそのうちには、
記述するに足るべく、また記述せざるべからざる俳士少なからず、されど余等
は、こゝにそれ等の人々を列ね記するにと、めむとす。

信州に曾良あり。蕉門の名家たり。和州郡山に原田字古あり。浪華に舍羅あ
り。伊勢に大淀三千風あり。その他、建部涼袋、松倉嵐藤、岡村不卜、俱に名家
たるにはぢず。

また、江戸に水間沾徳あり。俳諧を露沾公に學ぶ。また、公の門に菊岡沾涼あ
り。沾徳の門に、犬高子葉あり、堀内仙鶴あり。また宗祇か、跡を慕きて、一機
軸を出したる、稻津祇空か如きものあり、その門に紀逸、祇徳の徒を出しぬ。
また、伊賀は芭蕉が生地にして、伊勢に隣りたれば、俳諧大にさかへぬ。その
うち梢風尼が如きは女流俳人として、その名高く、また天野桃隣などの名家あ
りき。

その後、明和、天明の頃、大名を俳壇にかゝやかせるものいと多く、尾州の曉臺
の如き、谷口蕪村の如き、關更の如き、春秋庵白雄の如きは、大嶋蓼太等と相な
らむで、優妙なる俳句を吐さぬ。ふれ等の人々は其角、嵐雪、その他の故人を
超越したる技倆ありとは、いひがたかるべきも、必しもさまで劣れるものには
あらず、横ざまにその品を磨するはかたからざりしならむ。その他曉臺に學
びたる俗青、士朗の如き。またその後に出てたる蒼虬、二茶等の名家は、ゆた
かに俳諧の命を双肩に擔ふて、今日に傳へたるの功あるなり。余等は、こゝに
この人々の俳句を味ひて、記述の筆を投げむとす。

- 曉や鯨のほゆる霜の海 曉臺
- 本の露末の平や花木董 同
- 春草の上につもれる日敷かな 同
- 振袖の大和はあかし日の初め 同
- 陸奥殿のさ蓬なり千松島 同

露の世の露の世ながら去なから
瘦はつまけるあ一茶これにあり
葉の鳥の口あく方や暮のかれ

同 同 同

第十章

結論

思ふに、俳諧は最も平民的のものにてありなり。遠く溯りて、その淵源を追
究すれば、大宮人が花の宴、月のあつまりに、もてあそびたる和歌に出で、更に
連歌より流れ來りたるものには相違なかりしなり。然れども、連歌は和歌に
比して、幾分か平民的傾向をなしたるなからむや。例へ連歌は、はじめに於て
は和歌と均しく、貴族の専有にてありにもせよ、その流風は、追々に平民の
頭上をかすめ來りたりしは、争ふべからざるの事實なりとす。特に、俳諧連歌
なる一新相が、賞翫せらるゝに至りてや、その調、その語、すでに優に、やさし
き雲の上人の境を脱離して、賤が伏屋のうちに、つき入りたり。宗鑑の犬筑波
集を讀まば、平易卑俗の誣謔を弄するの裡、すでに長袖の氣、冠の風、うすらぎ
て、著しく平民的吟咏と化しぬ。貞徳によりて、俳諧の名、確立するや、已に
全く平民的のものにてありしなり。その梅翁の談林、蕉翁の正風は、正しく自

ら平民的短歌を以て本領となしたりき。見よ、俳諧に遊ぶの士にして、貴族の地位に座せるもの果して幾人ありしか。かの露沾公の如き、冠里公の如き、蟬吟の如き、風虎の如きものなきにあらざりしかと、これ異數なり。余等はこれに於て、讀者と俱に俳諧が平民的の吟詠にして、特に、中等種族の間に賞翫せられたりしを是認せざるべからず。

俳諧の價值は、和歌に比して、漢詩に比して、歩を譲るべきものにあらず。俳諧は、その調に於て、その想に於て、その語法に於て、その句体に於て、優に嘆美すべき一特相を形造りたりき。もしその源流に溯らば、漢詩はこの小兒の父にして、和歌は母にてありしならむ。さればこの小兒は、かの父母に比して、齡少きものなり、力弱きものなり、智淺きものなり、思淡きものなり。而して最も經驗なかりしなり。然れども小兒は、何時までも小兒たるべきにあらず、幾たびか散る花に遊び、幾たびかさへわたる月をながめなば、如何でか成長せざらむ。もしそれ年を重ね、月を閲し、四躰強固にして、精神健全なるときに

及ばし、かの父母は如何にかあらむ。白髮系の如く、骨立ちて、聲枯れ豊顔いつしかに去りて、難波著き、老耄事に堪へざるに至らむ。然れども、これ人に於てこれあるなり。この小兒の父母は、げに老耄せざりしならむ、氣力摧げざりしならむ。されどこの父母は、決してこの小兒を指して黃口となし幼弱となすを得ざりしなり。故いかにとなればこの小兒の生長一たりき、その父母のたゞしき遺傳を保ちて、さらに物に觸れ、事に感じ、幾多の鍛鍊と、幾多の習養とを経て一時相と現顯しむこそかにいさましく屹立したればなり。これに於てかれは小兒にして小兒にあらず、父母また父母にして父母にあらず。

それ俳諧は一特相を有せり。さらば、其特相の價值は、和歌と漢詩とに比して幾何かあると問はし、學識ともに淺薄なる余等は明らかなる答辯をなして、讀者を満足せしむると能はざるなり。然れども俳諧が、和歌に對して超越するの點はその平民的なるにあり、自然なるにあり、狹少なる壺中に蟠屈せざるにあり。

ろもく和歌は、はじめに於て、かゝる壺中に蟠屈したるものにあらざるなり。その創始の時代に於ては、和歌の天地はきはめて快濶なりき。清きもの、あはれなるもの、うるはしきもの、れもしろきもの、うなじきもの、うれしきもの、凡そこの世の風光、歌人の眸子に入りて、その情緒と結びつくや、秀麗にして、優婉なる三十一ともしは、ゆくりなく口唇に上ばりしならむ。然れども、年月を経て、弊風は、しばしその間に興りぬ。古今集は、萬葉集に比し、後撰集は古今集に比し、さらに拾遺、後拾遺、金葉、詞葉、千載の諸集をとつて、相互にこれを前時代に生れ出でたるものと比せば、幾多の變遷の跡あると俱に、幾多の弊風を帯び來れり。かの萬葉集撰せらるゝの當時、人心純朴にして健やかなりき。而して和歌の齡は、いと幼がりしととも、汚穢なる塵垢を蒙らざりしなり。宜なり、後年人丸、赤人等を尊崇欽仰して、歌聖となしたりや。その他、家持の如き、憶良の如き、その朗かなる詩眼を開きて、いと妙へに、いと自然に咄出したるの歌は、或は偉麗、或は清鮮、或は豪宕の光彩を煥發して、永くわが

文界を輝かすにあらすや。この時に於て、和歌は例へ貴族の掌上に握られて、平民の文心を搖蕩するもの稀れなりしとべいへ、その後世に所謂、雅言なるもの、この時代に於ては最も調ひたる普通の言なりしなり。この時の歌人は、花と咏すれば、よし野、月と詠へば三笠山といふが如き規矩なかりき。かれ等は、その語調に於ても、その理想に於ても、その觀察に於ても、濶大廣漠の境に歩せり。彼等は題詠を旨とし、方式を嚴立し、小天地に跼促して、外に出てざるが如きとなく、自由に於て、また自然、碧空を仰で濶歩したり。こゝに於て、思ふがまゝに人を寒殺し、熱殺しぬ。何となれば、かれ等は自ら泣けり、自ら悲めり、自ら樂めり。苟も些の虚偽なき紅涙、如何でか人を泣のしめざらむ。眞實なる怡樂、如何でか人を微笑しめざらむ。

かの紀貫之も、また非凡なる詩才を有きたりき、彼が所謂、猛き武夫をもなかしめ、鬼神をも笑はしむる歌人の本領は、かれが殆ど到達せしとよろならむ。然れども、和歌の趨勢は、進歩するとも、益、弊所に陥落しぬ。その金葉、

後世歌の
流風

詞葉千載の諸集、世に出でたる時代に於ては、和歌は最も繊弱なるものとなり、巧緻なるものとなり。何となれば歌人は、萬葉以來の歌聖を追慕するに急はしきと俱に、これを摸倣せむと欲するに汲々たりき。而してかれ等は、その形を摸し、その躰を摸するを、おれ務めて、未だ人丸が瑰偉なる詠歌、赤人が雄麗なる口吟、其之が幽艶なる格調のよつて以て、溢出する所以の源流を知らざりき。かれ等は、またその源流を知らんとはつとめざりき。かれ等は往昔の歌人が咏せし花、吟せし月を美しとみたれども、未だその詞のうるはしき、語の清らかなるものは、これを吟咏せし歌人の眼孔、鑿りなく、胸裡、清朗なるが故たるを知らず。その根本を見ずして、その梢を賞し、小やかなる枝と葉とに心を勞し思を練り、以てわが能事終れりとなしぬ。

たゞにこれのみにはあらず、そのあはれなる歌人達は、往古の躰を學ばむとしたりたれども、その躰を學ぶとさへ容るされざりき。年月の経過は猶豫なくかれ等を載せて、その行かむと欲するとおろに行けり。こゝに於て、かれ等は、その

内部のすこやかなる能はざりしのみならず、その形に於て已に既に衰頹しぬ。かれ等の萬集ぶりの高き調を保つと能はず、おもしろき風情、うるはしき風姿に心をこめ、題咏の則を立て、語調の法を守り、偏狭なる小天地に蟠屈せむとせり。彼等が理想は高からず、またその情緒は朗かならざりき。而してすこやかならざるかれ等は、更に自ら、うるはしかるべき事、すなはなるべき事、やさしかるべき事、あはれなるべき事を旨とし、鐵線をのばきて、用捨もなく、その躰を縛せり。こゝに於て、四肢萎へ、手足弱へぬ。然れども彼等は自ら、これを甘じて、その拘束を脱せむとするの方を講せざりき。

然れども、この間に於て、名歌人また産出せざるにはあらず。かの中興の祖を以て、尊崇せらるゝ定家の如きは、詩才横溢殆ど人をしてその妙技の窮極するところを窺ふ能はざらしむ。只に定家のみにあらず、西行あり、長明あり、兼好あり、以てわが歌壇の光彩をますに足れり。

げにこれ等の歌人は嘆美すべき技能を保有せり。されど和歌の大勢はこの間

に於て腐敗し來れり。
不自由の拘束を受けたる和歌は、例へその間に幾多の大匠名家ありたるにも
せよ、追々に萎靡し、枯凋するに至りたるは争ふべからざるの事實にして、ま
た自然の結果なりき。

和歌の進
歩せざり
し所以

要するに和歌が、その美しき歴史と、たのもなき躰格とを有しながら、進歩す
ると能はず、大に衰頽に傾かむとしたるものは、歌人達が、月花雪の小天地に
さまよひ、題詠語法の狭偏なる境に逍遙し、平民的の傾向をきらひ、やさしく
うるはしき事のみを旨とし、社會の變遷に順適せず、長歌をすて、三十ひと交
字を主とし、外形を彩るとをつとめて、内裡の脩養を計らざりしによりしなら
む。

紅葉ふみわけ、鹿の鳴く音さへて、袖をぬらし、さへわたる秋の夜の月、うち
ながめては、千々に思ひひすほる、はわが大宮人なりき。長閑なる優長なるこ
の貴族の間にもてあそばれ、舞蹈、音楽、蹴鞠と俱に和歌をつらねて、賞翫せら

れたりき。かく貴族の専有物たりし和歌が、次第に纖弱に、次第の活氣うすら
きたるは、あやうむに足らざるなり。

和歌は斯くの如くして萎靡したりき、而して俳諧はこの間に生長したりき。
俳諧が、貞徳によつて産れ、梅翁によつて榮へ、蕉翁によりて大成せしとは、余
等が、一ばく繰り返へしたるよろこびて、余等がこの書の目的も、要する
にこの三變遷の跡を探究し、抽出するにありたれば、讀者は、すでに、腦底に明
かなる観察と會得を捉へたるならむ。

俳諧は平
民的あり

それ俳諧は平民的に産れ、平民的に長し、平民的に榮えたりき。貞徳、宗因、芭
蕉の三俳諧は、その平民的なるに於て、その躰裁形容に於ては、殆ど相一致
するところなれども、かれ等の本領、目的、傾向、所期、理想に於ては、著しき相
違をなせり。それ俳諧の幼年時代の、貞徳によりて形造られ、その青年時代
は、梅翁によりて形造られ、その壯年時代以下は、大概蕉翁によりて占有せ
られ、また構成せられたるものなりき。和歌の如きは萬葉に於ても、古今に

於ても、新古今に於ても、將、降りて長流、契沖、真淵、宣長、春海、景樹に至つて次第に變遷し來りたれども、その色彩は、相傳へ、相襲き、嘗てゆるところなかりき。されど俳諧に至つてはかの三大流風は著しき、特異の點を保有せり。されば、もし今この三大派に就きて、文字上の解釋によりたる俳諧としての俳諧は、そのうち何れぞと問はゞ、談林派にありしならむ。何となれば談諧に妙にして滑稽に巧に、最も輕快の趣味を有したりきは、談林調にありたればなり。されど談林調は、その目的とするところの滑稽に於て、無上無比の成功を遂げたるに俱に、詩としての價值は遂に、正風の頭上に專傾せらるゝなり。

かの貞徳風は、俳諧の根基を創立しれるには相違なし、かれ等は、この名譽を双肩に擔ふに於て、一々躊躇すべきところなし。然れどもかれ等は、また、その、きはめて幼稚なりしとの評語を蒙るも、これに甘せざるべからざるなり。而してかの談林風は、所謂俳諧の中興と稱讃せらるゝの價值あり、優に

俳諧の價
値は正風
にあり

一異光彩をわが文學史上に煥發するに足るなり。然れどもこの二派就中談林風はその得意とする好笑的口調を、ますます巧に、愈自由に發揮したればとて、もし正風俳諧世に出でざりしならむには、遂に俳諧をして盛榮繁茂、享々として天空を摩するが如き勢力わらしむるを得ざりしならむ。余等この故にて、に揚言せむ、俳諧の價值は正風にありと。談林價值なきにあらず、特相なきにあらず、然れども昂然、和歌、漢詩と對立したる所以のものは、正風の俳諧ありたればなり。

俳諧は正風に至つて、はじめて大成す、さらば正風俳諧は和歌に比してその地位果して如何。

それ俳諧は、和歌が貴族の專有に歸し、平民は文學的趣味を汲むでその乾燥したる喉を濡すと能はざるに於て出で來れり。げに俳諧は平民の喉には此上なき香氣ある甘露なりしならむ。

思ふに俳諧と、和歌とは、さまざまなる點に於て相違するところあり。而し

俳諧と和
歌の相違

て俳諧か平民的なるとは最も相違するの點なりとす。俳諧は、斯く、貴き一階級の外に恰好せざりし和歌と異なりて、俗言をさらはず、題詠をなさず、最も平易なる口調を有したれば、そのこれを賞翫し、愛好する區域は、さほめて廣かりしなり。いやしくも眼に、一丁字あるものは、農夫、樵夫、漁人、工人を問はず、これを味ひ、またこれを學び、これを吟ずるを得たりき。これ俳諧が、徳川昇平の天地に勢を奮ひ、その餘流を汲むもの今もなほたえざる所以なり。

俳諧の法

俳諧には法則なきにあらず。去嫌の法あり、附合の法あり、切字の法あり、その他さまざまなる法則を有したりき。而して貞徳は、連歌に則り、なかくにおこなふ所なる規律を立てたりき。而して、この墻塼の裡を脱して、縦横に馳驅せしめしは、談林風なり。芭蕉に至つて、その大活眼中には己に、區々たる方式を有せざりき、それは必ずしも古法を破らむとはせざりしかど、またこれに拘泥するの愚を學ざりき。

俳諧は最も廣大なる境界を保て

斯く俳諧は、小摸規に蟠りて見出づることを能ざるの陋をなさざりければ、自在にして縦横なるを得たりき。

彼等は斯一形体に於て、豪放不羈なり、あゝに於てわが感情を露呈するや、最も自由自在にて拘束せらるゝところなし。而して更に彼等はその内裡に於て最も廣大なる境界を保てり。かれ等は味喻をもおもひ、詠じ得るなり。かれ等のあるものは馬糞をも吟せり、小便はまたしばしば、かれが好題目となりたりき。かれ等の詩才は小便を捉へ來つて

このところ小便無用花の山
蓮の葉に小便すればお舍利かな

など口吟せしめたり。ふれ和歌が見て、以て、野卑となり、汚穢となすところに来て、かの歌人達は、眉をひそめ、唾を吐きて、直ちに逃げ去るならむ。而して俳人は憚る所もなく得意げに放吟す。ふれ和歌と俳諧とが相違する點にして一は貴族的、一は平民的なる傾向を表白せり。天地の萬物、何れか詩

材たらざらむや、かの馬糞の如き、小使の如き、必しも好むで採るべき詩材にはあらねども、もしそれ一とたび、詩人の錦心繡腸に觸れて、融和せられなは、如何でか美にあらすといひむや、かの歌人は花を詠せは成るべくだけ櫻を詠せむと、梅を詠すむと、更になるべくだけ芳野、嵐山の花を詠せむと心懸くるの間に於て、かの俳人はすみれをも、桑種のはなをも、すべての花を吟せむとす。弊風に染まりたる歌人出、愈出で、益、固陋に安ずるのとき、潑々たる俳人は、いとのびやかに、いと廣き野邊に逍遙せり。

俳諧の形
体は犀利
直截あり

それ俳諧は和歌より流れ来りたるどころいと多けれど、斯の如き特異の光を放ちぬ、俳諧は和歌に比して、平易通俗なると俱に、その形体は犀利直截なりき。和歌は、その賞翫せらるゝ境は優長なる貴族にあり、その語はのびやかなる三十一文字なり。内に養ふところ、外に擣ふところ、將たその修養、所期、一として、あはれげに、ものやさましく、すなほならぬはなし。而して俳諧は、率直なる平民に愛好せられたり、その想は佛教に練られ、老莊に鍛

俳諧と
しるみ

られ、世の榮華にうむきて豪放自適せる圓顛の徒によつて、しばく轉々せられたりき。その語数は十七文字の短きにあり、これら相混和たる俳諧が和歌に比して一段犀利直截なるは理なり。之れを要するに、俳諧は、おもひろしといへるを以て己が本領となしたりき、然れどもふれ笑と伴ふもしるみにあらず、また談話と伴ふものにもあらざらむ。ふのおもろみの、凄慘なるところにも、悲酸なるところにも、静寂なるところにも、幽閑なるところにも、その何れにも宿らざるなきものならむ。かれ等は世のはかなきを知れり、このはかなき世を調へる瞬間に於て、かれ等 自然の力の廣大なるを認識して、また、はかなき理想を含みたる句を吐けり。而して、そのはかなき句のうちには、己にふるもしるみあり。何となれば自然の力の大なるを知り、その力に委ねてこの世を樂まむとすればなり。かれ等は自然界の風光を觀て、花に、月に、わが心を和げ、また樂まむとせり。されば俳諧のおもしろみは、なべての美のれも、しるみに抱括せ

らるべきものなるを俱に更に一段高度のものありき。

而して、俳諧、また諷諫の一特相を有せり。かれ等のあるものは頻りに諷諫をもつて俳諧の重なる價值となせり。而して、この諷諫の語は、屢々人をあやまりたりき。思ふに諷諫とは、天地に對する諷諫なり。ならむ巧に人の弊所を諷し、冷眼をもて、これを嘲罵し、あからさまならぬ陰秘にして、而も鋭利なる手段を弄し、他をして指を眼中に突入せられたるが如き感あらしむるものは、狂歌、狂句の得技とするもろなり。かの川柳なるもの、その言は、卑なりと雖ども、その調は俗なりと雖も、人の弊所を指摘し、金針を頭上に刺すが如き殆ど余等をして畏縮するが如き思あらしむ。これ彼等が期するもろは嘲世諷俗にあればなり。されど俳諧の保有せる諷諫の技倆に至つてこれと異れり。かれ等は天地を諷せむとせり、人生を捉へ來つてこれを解釋せむとす。老莊佛に薰化せられたるかれ等の眼光によつて解釋したる人生は如何にありしか。

もし、それ莊子の寓言をとつて、諷諫となさば、俳諧もまた諷諫をなしたるならむ。花に浮れ、月に酔ひ、白粉を粧ひ、錦繡を着るも、無情迅速の理を會得したるかれらの眼には黃梁の一夢消へなば跡なきを悟らしめけむ。窈窕たる佳人、偉大なる英雄、も一たび西風に乗りゆかば、その美、その勇、何處にかある。而して俗人はこれを悟らず、幻の中に醒寤し、苦慮し、泡沫の如き榮華をむさばる。かれ等はこれを觀て如何にあはれと思ひしぞ。よゝに於て、かれらが理想の世の事物に觸れて動くや、人生の敗果なきを絶叫し俗人の迷夢を破らむとしぬ。俳諧は諷諫せむが爲めに、諷諫したるにあらむ。彼らが腦底の理想發動し來つて諷諫となりしなり。かの莊子の徒は、言を事に托して、わが理想を發露せむとす。俳諧は事に觸れ、ものに感じ、理想、まゝ光をはなちて諷諫ともなりたるならむ。

概言するに、俳諧は客觀的吟咏の傾向あり。かれ等の多數は、圓顯なりき。清貧を樂しみ、幽閑を愛し、塵世以外のものなりき。あるものは劍を摧き、

自然を愛せり

あるものは黄金を捨て、この風流境にあそびたりき。よの故に俳諧が脱世間的なものは自然の順序なり、而してかれ等はその眼睛を開き、蔽なき情緒をみながらしめて自然界を客観的に観察したり。かれ等は最も天然を愛するものなり。かれ等がこれを受するや、冷絶高絶なるものとして愛したりき。もしそれ極端にこの世を厭ふの士は、煩悶懊惱、殆ど身を處するのどころなからむ、たゞかの俳士、花に憂を遣り、月を思を散す、豈にこれ天然を愛するものにあらずや。思ふに俳諧は、その休するともろ老莊或は佛教の理想にありき。またその観察は透徹せむとを期し、普遍ならむとを期したりき。この故に最も凱切精到なり、一句短しといへども、その語は深刻にして骨に徹せむとす。

讀者乞ふ、上來論じたる俳諧は、主として芭蕉、及びその薫陶を受けて、第二の芭蕉、第三の芭蕉たるべきものらにつきていひたりしを記憶せよ。それ芭蕉以後その風流に遊び、俳諧を唱へるもの、その數枚舉に暇あらず。かれ

芭蕉の流を汲める

等は芭蕉の流を汲めり。然らずむば芭蕉の流を汲めるもの、流を汲めり。斯の如く一より二、二より三、三より四、以て百千万に至る。然れどもかれ等は未だ嘗て芭蕉の理想に到達せしものあらざらむ。かれ等は、たゞる同ろげに雲霧の裡にその理想を捉へたるものはありしならむ。されど少くともかれ等は芭蕉が俳諧はかく、あるべきものなりとの教は、その奉持せむとするところにして、まゝ芭蕉の理想は、あれ等が観むと欲し學ばむと欲したるところならむ。芭蕉を論じて、なべての正風俳諧を論じたりとなすは非なるべけれど、正風俳諧の精粹は芭蕉にあるを思へば、苟くも俳諧を究めむとするの士は、まづその精細なる観察を芭蕉に下すべきなり。況むや芭蕉が理想は、或は時に凹凸を呈し消長を來し錯誤せられたるにも拘はらず、後世正風、俳諧の中心を貫きて、つくるとなきをや。これ余等が一言讀者に注意するところなり。

られ芭蕉は理想を有せり、其角も、支考も、惟然も、去來も、理想を有した

俳人の理想

り。否、何人とも雖もその幼稚、健全、軟弱、勇壯、錯誤、圓滿の差はあれども、殆どこれを有せざるものはなからむ。芭蕉が理想は、其角嵐雪等と相比して、或は同じく、或は同じからざりしならむ。況むや百千萬の俳士は、個々相互に、特異の點と、一致の點とを有したるをや。されどなべての俳人の理想は、その脱世間的なるに於ては少くとも一致したるならむ。その天然の風光を樂まむといふに於ては、相背馳せざるなり。されば俳諧を通じて、老莊佛の味を保有したりと概言するも、たれか、これをあやまれりませむや畢竟するに、俳諧は自然の風光を吟咏するの裡に、わが理想を發揮せむとするものにはあざりき。ある時は、かれ等はこれをなしたり、その理想を月に、花に、發露せむとしたるなきにあらず。されど概言するに、俳諧は、わが理想を發露せむとて吟咏し、また吟咏して發露せむとしたるよりも、むしろ自然を觀て、自然に吟咏せむとたりなり。自然を觀て、わが情緒震動し來るや、いと巧に、これを咏せむとせり。所謂無心所着はかれ等が心得な

りしならむ。俳諧には、ありし理想の露出したるものあれば、これ理想を露出せむと期して、こゝに至りたるものよりも、情感、沸騰して、またその理想を露出したるもの多からむ。されば、心、物に感じて興を寫す、これ俳諧が客觀的叙情詩の傾向を有する所以なり。

俳諧と和歌の比

余等をしてゝに俳諧と和歌とを形容せしめば、前者はなほ疎畫の如く、後者は、なほ土佐繪の如きかたむきなからむや。何となれば、一はやぶしき風姿、すなはなる風情をもつて、あはれに詠せむと期し、一は幽玄をむねと、高遠を主とし、閑寂を体としたるものあればなり。それ俳諧は筆を落して、五嶽を揺し、笑傲、滄洲を凌ぐが如き快絶の趣味はなかりしならむ。また、聖電、城を傾くるが如き意氣も、その有せざるところならむ。されど急促たる短句は、活々として人の肺腑に透徹するものあるなり。俳諧は蜜に似たる愛、花に似たる情を咏せ、こゝいと稀れなりき。これ俳諧が優美といふとより、むしろ幽遠といふとを期し、すなはといふとよりむしろ、閑寂といふ

俳諧の餘

とを主とし、たるに起因したるならむ。而してまた老莊佛に修養せられたる理想と、十七有言の短句と、平民的の傾向とは、これをまてますく蕭散幽遠なる疎畫の観あらしむるといふに、おもしうしといふとに留意したるが故ならむ。畢竟談笑といへるとも、また冷笑の氣味ありと思はしむるとも、俳諧はなべての美に必ず伴はるべき、おもしうみと、更にすこしく、その趣を異にしたる、おもしうまといへるを有したればなり。人はいふ、俳諧は和歌に比して野卑なるところありと然り、その平民的短歌は、時に野卑に傾きたるものもありしならむ。されどそれを總括して、觀察せば野卑といふよりも、むしろ平民的といふのまされるにまかざるなり。

余等さらに翻つて、この平民的叙情詩が、餘弊を生じて、社會に毒を流したるものあるを記せむ。かの和歌が、大宮人に賞翫せられて、蹴鞠、舞樂と同視せられ、活氣を消耗し、本領を埋没したるが如く、この平民的叙情詩は茶の湯、活け花と同一視せられて、世外人の玩弄物と化し、さらに一方に於

ては、射利の徒にけがされ、無智の徒にもてあそばされ、人をして和歌の流、その末、變つて博奕となるべしとは、住吉玉津島の神も、いかでかいらいさんど、なげくに至らしめぬ。

俳諧隆盛を極むるや、川柳の一派を出し、さらに三笠附、地口付け、冠付け、地口モチリなど、流行したりき。みれらは、俳諧として、あげつらふべきにはあらねども、またその餘流たるはあやまむべからず。それ三笠附は、眞に射利の徒にもてあそばれたるものにして、その害、殆、博奕と相均し。この故に徳川幕府はしばしば法令を出してこれを罰したりき。

三笠附の禁令

享保頃に出でたる法令は、三笠附を以つて、博奕と同じく、さまざまなる處刑をなしたりき。その享保十一年ぎめの御定書には、三笠附、點者、同金元、并宿は、博奕打、筒取、并宿と同じく、遠島の刑に處たり。三笠附句拾は、取退無盡札賣と同じく、家財取上、非人手下の刑に處たり。また、その後、三笠附なしたるものは、博奕打たもの、取退無盡したる者と共に、家財家職

を取上ぐる程の過料に處し、家藏なきものは五貫文、或は三貫文の過料に處し、或は三笠附點者、金元、并宿の家主は、身上に應し、過料の上、百日手鎖に處し。延享元文の御定書には、三笠附宿は、身上に應して、過料、名主家並、向側、悉く、過料ありき。要するに、これ博奕と相去る甚だ近ければなり。而して前句附、冠附は、貞享、正徳、享保の間に流行し。元祿八九年頃に懸賞あると起りぬ。餘弊、人をして殆ど嘔吐せしむ。

要するに俳諧は、はじめの清き高き天職を放棄して、次第に卑賤なる境に沈淪し、遂に今日に至るまで賞を懸け、句をつのり、似而非宗匠の糊口の資をなすに至りたるは、かなしむべきとなり。それ懸賞なるとは漢詩に起因し、連歌にうつり、さらに俳諧に至りて、その弊を長じたるものなり。

後世の俳諧師

見よ、後世に所謂俳諧師なるものを。かれ等の多數は、風流人と稱して、髪を剃りて、頭を圓め、身に十徳をつけ、手に扇を握り、雪の朝、寒さを堪へて、かなたてなたをうろつき、花をたづねて、うかれ歩き、泥の如く酔ふて、

あわれにも、世の塵を厭ふが如きそふりをなせり。かれ等は、芭蕉其角が、かたちをまゝびて、未だかれ等が眞に世にそむきし所以の内裡を知らず、もゝこれを窺ひ知るとを得たりとするも、かれ等ハ如何でか、これを學び得むや。而して、あるものは大鼓持の如く、巧言、令色ひたすら人の鼻息をうかへて、利を射むとつとめたり。かれ等が胸裡には醜穢なる臭虫、群り住へり。如何でかふれをして芭蕉の如く、其角の如く、嵐雪の如くならしむるを得むや。

勿論今日のこれ俳壇、今日までの俳士にも、操行高く、風雅に深く、直ちにその歩武を古人に接するものなきにあらざれども、その大勢はすでに斯の如くなりしなり。かれ等は徒らに故を温つね、古を襲き、吟咏するにあらざして、句をつらね言をならべ、以て揚々自得せり。あれ等は花を吟し、月を吟すれども、わが心、花に動かされ、月に感じて、吟詠するにあらざ、たゞ吟咏をなさむが爲めに、花といひ月といふなり。而してかれ等は猶豫なく、

剽竊し、巧に摸倣し以て懸賞を得むとあせれり。俗の俗、卑の卑、臭の臭、いふに忍びざるものあるなり。これ今日俳壇の大勢なり。然れども、これを以て俳諧の燦々たる光明は、消ゆるとなきなり。その幽遠閑寂なる趣味は、今の文士をして、陶然として酔ひ、飄然として逍遙せしむ。思ふに我今日の文界は、よの愛すべき敬すべき平民的短歌を棺に收めて、嘆美と追慕とを以て、これを葬るべきの時ならむ。嗚呼、社會の裡面に隠れて未だ顯現せざる、わが大詩人よよつて、鍛練せられ、融和せられれば、俳諧果して如何の異光彩を新韻文の面に、煥發せしむべきや。

俳諧史傳終

明治二十七年三月十日印刷
 明治二十七年四月廿五日發行

定價三拾錢

著述者

小此木信一郎

群馬縣多胡郡日野村

著述者

布川孫市

山形縣北村山郡東根村大字東根

發行者

堀口庄三

東京神田區表神保町六番地

印刷者

西森拙三

麴町區三番町三十五番地

印刷所

南海堂

麴町區三番町六十九番地

發行所

女學雜誌社書店

東京市神田區表神保町六番地

皇后陛下御覽濟の書
明宮殿下

嚴本善治妻譯

小公子
再
よみ本
版

正價 金二十八錢
郵税 金八錢

偶書

小公子を讀む

昨日女學雜誌の嚴本君「小公子」一冊を寄せらる曰く吾が内子の譯する所也。
淡泊に直言すれば余は方今海内にありて女流の著述にして能く我眼を惹くべきもの出でむは想はず故に此書に於ても亦た甚だ重きを置かず但た知人の贈りたるものなるがゆえに偶々煙を喫するの暇漫然其の第一ページを開き視しのみ而るに讀むべき數行にして道辭温順太はだ常に非るものあるを覺えたり因て更に二三ページを讀みゆくに彌と益す凡ならざるものあるが如し是に於て心煩る驚き起ちて書笥を探り原本を取り來りて且讀み且照らし終に第一回を究はりたり是日の務學を待ち携て寓室に歸り直ちに燈を掲げて之を讀む既に樂を卒りて尙ほ飽かず又た原本に就て此書の未だ譯し及ばざる第七回以往を讀み小公子の第八誕辰を看了りて廢に入れるときは夜既に三時を報せり。

「小公子」は英國今代の名家ハルチット夫人の傑作「リットル、ロード、フオントルロイ」を譯せるもの全篇十五回あり是は先づ前半第六回に至るまでを以て一冊となせるなり後半の功を成すも蓋し遠きにあらざらむ歟。
原作の何物たるは其書の既に十數版を重ねたるを屢ば之を英米諸國の劇場に演ずるを以て其の一斑を想ふべし余は特に斯の可憐なる女學士の譯文を曾ばむ。
購ふ余が詞の不敏なるを吝むる莫かれ余は第一に譯者が英文を讀むの容易なる猶ほ父母の手紙を讀むがごとき

白表女學

雜誌改題

評論

每月一回
廿日發兌

定價	東京	一冊	六錢
	市	六冊	卅三錢
	內	十二冊	六十三錢
	外	共	六十六錢
	郵	六錢	五厘
	稅	三錢	六分
	共	六十六錢	

名號して「評論」と稱し、人生の榮枯、人間の盛衰に大影響ありと看取せる時事を論評す。本來、識淺く、情淡くして、敢て此の大任に任ず、蓋し、不當過誤の失少なきにあらずと雖も、一片の誠意熱情はありあり、些さくも以て時務を語るに堪ゆべしと信ず。若し夫れ自ら量り内に顧みず、安んずる理を擧げて他を上下し、道義を規として、人の完きを望むべけんや。但夫れ、時事は公開せる共有の問題なり。評者は、亦た人情義理の爲に代言辯論すべし。何んぞ必ずしも私に就きて自ら許すことと。讀者希くは世の常否を列せよ。若し之を以て當れりせば、讀者評者ともに其威嚴に従ふべし也。

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ペーシ
定價 郵稅共金拾錢

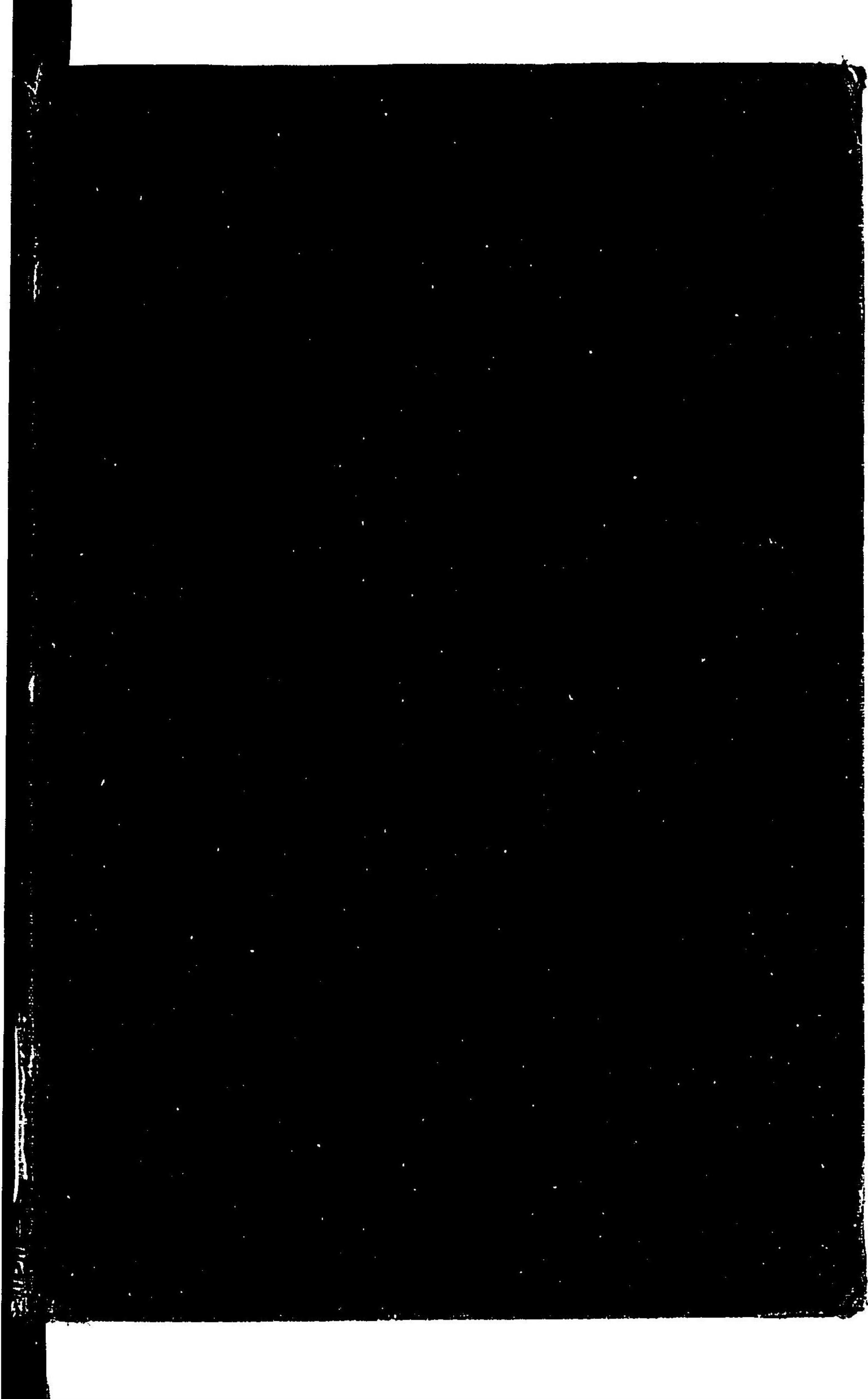
「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率、之に同じく、現今實施する所亦之に異なるとなれば、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂ふべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。(明治女學校版)

東京市神田區表神保町六番地

發兌所

女學雜誌社書店

92
47



72
47

087290-000-6

72-47

俳諧史伝

小此木 信一郎

布川 孫市 / 著

M27

DBE-0533



